飼い主募集します！

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
飼い主募集します！

【Ｎコード】
Ｎ４３４６Ｎ

【作者名】
鉢嶺来

【あらすじ】
ある日、俺と姉貴は珍妙な犬のコスプレをした美少女と出会う。
姉貴は面白半分でその美少女を部室まで
連れて行くがホントはその美少女、人間じゃなく本物の犬で…！
？

捨て犬拾いました（前書き）

ギャグとか学園に挑戦してみたかったんです、出来心なんです、ごめんなさいｗｗ

捨て犬拾いました

日本には梅雨というものがあるのをご存知だろうか？
そう、ジメジメして一日中雨が降り続く、あの嫌な季節である。
風流だね、なんてことを言う奴もいるが
俺に言わせて見ればこんなもの洗濯物や弁当に
カビが生えるだけで実益なんて０に等しい。

そんな、６月のある日のことだった。

「おい、バカ、遅れるぞ」

第一声から俺をバカ呼ばわりしたのは
俺の義姉、再婚した義母の連れ子で金髪に赤い瞳という
どこからどう見ても日本人には見えない…当たり前だ、イタリア人だからな、
ただ産まれも育ちも日本だからイタリア語は喋れない。

まぁ、その似非イタリア人のロング金髪で容姿端麗成績優秀スポーツ万能な俺の姉貴。
滝内シモーナ。一見完璧に見えるが性格が最悪なのが玉に傷…というか致命的だ。

やたらとルックスと頭はいい癖にそれをどうにも俺を虐めるためだけに
使おうとしかしない。で、姉貴が呼んだ俺の名前は滝内翔太。
正真正銘の日本人だ。
ちなみに顔は並だ…と思う。
本当のお袋は俺が２歳の時に病気で死んだ、らしい。

何せ2歳の時のことだから覚えちゃいないがね。
で、今の母親と親父が再婚したのが4歳の時。
その時から姉貴とは一緒に住んでいる、わけだ。
ちなみに姉貴と言っているが誕生日は1ヶ月違うだけ。
たかが1ヶ月の違いで姉貴は自らの存在を敬えと毎日の様にこっぴどく俺に聞かせ続けた。

「さっきから何をブツブツ言っている、聞こえなかったのか、バカ」
「聞こえてるよ」

やれやれ、今日も姉上様がご立腹だ。

仕方ないから俺は肩に下げてたバッグを上げなおし、
傘をしっかりと持って姉貴の方へとついていった。

「大体、バカがこんな雨真っ盛りな時に
寝坊などするから悪いんだ、反省してるのか、バカ」

「わかってるよ、反省してるって」

そう、俺は今日寝坊した。
それで何時もとは違うルートを通って学校へと向かっている。
姉貴が最近発見したとかいうショートカットのコースだ。

「急げ」

姉貴の声に俺は溜め息まじりに姉貴の後を追う。
何の因果でたかだか1ヶ月の差でこうも格付けが決まってしまうのか。

人生とは世知辛いね。いや、マジで。

そこから５００ｍほど歩いたところだろうか。
姉貴がふと立ち止まった。

「どうしたんだよ？」
「おぃ、痛い人間がいるぞ」
「はぁ？」

姉貴が傘を持つ手を差し替え指をさす。
そこには布着れを纏ったやたら綺麗な女の子が座っていた。

「おいバカ、ちょっと話しかけてみろよ」
「…嫌だよ、これ以上変なのに関わりたくない」
「私の命令が聞けないのか？早くしろ、バカ」

姉貴がどげしという盛大な効果音付きで俺の背中を蹴って押した。
俺はもつれながら女の子に近づく。
こんなところでコスプレだろうか…？
猫耳…じゃないな、犬耳だ。
茶色い癖っ毛に犬耳をつけて長い髪は乱雑にしてたのだろうか、
あちこちが痛んでるのかぴょんぴょんと寝癖のようなカール状の癖
が飛び出していた。

更に良く見ると尻から尻尾のアクセサリーまで付けていて
オマケに服はボロッちい布切れ一枚だ。

しかも傘もささずに雨の中、ただじっと座っている。
俺は少しばかり溜め息をつくと意を決して女の子に話しかけた。
…仕方ないだろ？姉貴の命令だからな。

「なぁ、あんた、何やってんの？」
女の子は俺を上目遣いで見上げた。
尻尾のアクセサリーがパタパタと振られた。
最近のコスプレグッズは芸が細かいな…。

「わん！」と勢い良く女の子が吼えた。

「……」
俺は小さく首を横に振る。
駄目だ、完全に痛い子だ。
俺は姉貴の方に振り返るとその場を後にしようとした。

「なんだ、もう降参か」
「いや、絶対普通じゃないぞ、あいつ…」
「犬のコスプレをしてるときは犬語しか
話さないポリシーなのだろう、中々見上げた根性じゃないか」

「そういう根性は、別の分野で発揮してもらいたいね」
「そうか、それじゃあ翔太はあの見るからに痛い子を見捨てて行くのだな」
「そりゃ赤の他人だし、あの子も何か目的があってやってるのかも知れないしな」

そう言うと姉貴はワザとらしくニヤついて、
「そうか、あの格好だ、この後あの痛い子は群がる男どもに
手酷いボロ雑巾のように陵辱されて泣いて懇願しても助けてもらえず、
一生、お前のことを恨んで生きていくのだろう」

何てこと言いやがる、この女は。
じゃあ何か、俺がここでこの痛いコスプレ少女と
何らかのフラグを立てないと駄目ということか？
冗談じゃない、そう言おうとした時だ。

「いやいや、私はお前を責めたりしないぞ、
何せ赤の他人だ、”血が繋がってない”んだからな」

……くそっ、そこを強調してくるか。

「…わかったよ、どうすればいいんだ？」

俺が諦めたかのようにそう呟くと姉貴は満足気な笑みを浮かべて
「そうだな、とりあえず部室にでも保護しておくか、
放課後に警察に届ければ問題なかろう」と言った。

部室にねぇ…

「姉貴、章太郎と田辺は風邪で今休みだからいいが、大問題児が一
人いるぞ」
「ふむ…あの変態か、まぁ何とかなるだろう」

そう言うと姉貴は女の子に手を出した。
女の子は首を傾げて不思議そうに姉貴の手を見る。

「何だ、犬のくせにお手も出来んのか」
「…まず突っ込む所が違うだろ」
「冗談だ」

姉貴はくくっと笑いを浮かべると
「ほら、来い、お前の名前は何だ？」
と聞きながら無理やり女の子の手を引っ張ると強引に立たせた。

「…くぅ～ん」
「あくまで犬語を話すか、中々強情だな」

「はっはっ…わんっ！」
女の子はそう吼えるとダッシュで俺に抱きついてきた。

「うぉっ！？」

思わず俺は女の子に押し倒されるように転倒してしまう。
俺に覆いかぶさるように女の子は俺の腹の上に乗っかると
尻尾のアクセサリーをブンブンと振りながら舌を出す。

おい…まさか……

「やめろ！こらっ！！」

俺は必死に女の子の顔を引き剥がす。

「お前は変態に好かれる特殊能力でも保有しているのか？」
姉貴が溜め息まじりにそう呟いた。
知るか、そんなもん。
俺はなんとか女の子を払いのけるとその場を立ち上がる。

「俺は先行くぞ、姉貴が責任持って部室に連れて行けよ！」

そう言い残して俺はその場から逃げ出した。

マトモな神経で付き合っていられるか。

昼休み

姉貴は結局教室に来ていない。

普段、授業自体はまともに出ているから何か問題でも起きたのだろうか？
流石に心配になってきた。
うーん、一応部室覗いてみるか。
ちなみに俺たちは文芸部に所属している。
姉貴は部長だ。
文芸部は三階の渡り廊下を歩いて一階の部室棟の
一番奥という非常に面倒くさいというか嫌がらせとしか思えない場所にある。
そもそもこの高校の校舎は作りが複雑すぎる。
俺は歩いて部室棟まで行くと部室の扉を軽くノックした。

「誰だ？」
姉貴の声が聞こえてきた。
やっぱりここにいたか。
「俺だ」

手短に用件だけ言う。
口で争っても勝てないからな。

「他に誰もいないな？」
「ああ」

「よし、入れ」

ガチャっとドアを開けると何故か体操着の姿の姉貴と姉貴の制服を着た例の女の子がいた。

「わん！」

女の子の髪は綺麗に整えられていて長かった髪の毛はツイストに纏められていた。

「吼えるなっ！」

女の子が吼えたと同時に姉貴の叱咤が飛んだ。

女の子はきゅ～んと言って丸くなって寝転んだ。

「…もう飼いならしたのか、名前は聞き出せたか？」

「いや…少々面倒なことになった」

「？」

不思議そうな顔をする俺に姉貴が神妙な面持ちで言う。

「いいか、驚愕するなよ？」

そう言うと姉貴は一気に女の子のスカートをずり下げる。

「ばっ…何してんだ！？」

「よく見ろ、バカ」

「あん…？」

恐る恐る目を開けて目に飛び込んできたのは女の子のお尻…そして、そこに直接生えてるらしき尻尾…

「ほー、今のコスプレグッズは直接肌につけるのか」

「それなら良かったんだがな…」

そう言って姉貴は尻尾をおもむろに掴んで引っ張る。

「きゃんっ！？」

尻尾と同時に女の子のお尻も持ち上がった。

…？

どういうことだ…？

「生えてるんだよ、尻尾が、ちなみに犬耳も本物だった」

「なんだそりゃ！？どんな生物だよっ！！」

「うむ、思わぬところで未知の生命体と遭遇してしまったわけだ」

クエスチョンマークがびっしりな俺に向かって姉貴が言う。

「ライトノベルなどで良くあるだろう？

擬人化された猫とか、あれの犬ヴァージョンだな、これは」

「はぁ？現実にそんなものいるわけ…」

姉貴はペシペシと女の子の茶色い頭を叩く。

「いるんだ、ここに、現実に」

「わふっ」

「…頭痛くなってきた」

「くぅ～ん…？」

女の子が愛玩犬のような眼差しでこっちを見てくる。

「今朝話していた警察は駄目だな」

「何でだよ？」
「こんな不思議生命体を世間に公表してみろ、
良くて動物園で一生見世物、悪くて生きたまま解剖だ」
姉貴に言われて檻の中でくんくん鳴いてるところと
泣き叫びながら解剖されてるところが素で想像できた。
…まぁ、正直あまり良い気持ちはしないな。

「…じゃあ、どうすんだよ？」
「ここで飼うしかあるまい」
「はぁ？ここって部室でか！？」
心底驚いてる俺を無視して姉貴は話を進める。

「そうだな、まず名前が必要だな」
「無視かよっ！？」
「おい、バカ、しっくりくる名前をつけてやれ」
「そして無茶振りかよっ！？」
「何だ、ペットの名前の一つも考えられんのか、文芸部員の名前が泣くぞ」

姉貴は仰々しく両手をやれやれと言った感じに上げると
「まぁ、バカには少々荷が重かったか、すまないな、
お前の頭の中身が非常にお粗末なのを思慮に入れるのを忘れていた、
いや、お前は悪くない。むしろこんな単純な問題も出来ないお前を
指名した私が悪いんだ」

こいつ…一発殴ってやろうか。
というか名前くらい考えられるぞ、バカにすんなよ。

「名前だろ？いいよ、考えてやるよ」

俺は弾みでそう言うと姉貴がそこでほくそ笑んだ。
しまった…計算づくか、この女。

「よし、この犬の名前を決める大任を任せるぞ」
「…わかったよ」

俺は溜め息をつくと椅子に座りじっと女の子を見る。
ふむ…どう見ても女の子だ。
流石にポチやコロなんて名前をつけたら俺が姉貴にぶっ殺されてしまうだろう。

……

「おい、バカ、まだ決まらんのか」
「五月蝿い、今考え中だ」

姉貴は部長机に肘をつきながらジト目でこちらを見ている。

「うん、そうだな、泪乃(るいの)ってのはどうだ、泪と雨をかけてみたんだが…」
「何故雨だ？」
「そりゃ雨の日に拾ったからだ」
「…単細胞」

ぼそっと酷いことを言ったぞ、今。

「まぁ、いい、それにしよう、いいか、今からお前の名前は泪乃だ、いいな？」

女の子は不思議そうに首を傾げる。

「泪乃」
「くぅ～ん？」
「泪乃」
「はっはっ」
「泪乃」
「わんっ！」

3回目で女の子は自分の名前が泪乃である、と認識したようだ。
…意外にも頭は悪くないみたいだな。

「しかし、勝手に部室でこんな不可思議な動物を飼っていいのか？」
「部長の私が認めたんだから問題あるまい」

あるだろ、普通に、山ほど。

「顧問など居て居ないに等しいし、幸い部員は5名の少数だ。
外部に誰も漏らさなければ誰にもばれん」
「…姉貴のその性格は今に始まったことじゃないから、まぁ、いいけど」
「じゃあ、そういうことで午後の面倒は頼んだぞ」

そう言うと金髪を翻して姉貴は部室を出て行こうとする。

「おいおい！どういうことだ！？」
俺は慌てて姉貴を呼び止めた。
「午前中私がずっと面倒見ててやったんだぞ、
午後はお前が面倒を見ろ、万が一脱走でもされたら厄介なことこの上ないからな」
「いや、姉貴が面倒見ろよ…」

「お前は貴重な単位の取得をバカ犬もどきのために捨てろと言うのか？
何という酷い弟だ、お前の言うとおり部室に連れてきてやってしかも今の今まで面倒見てやっていたのは誰だというんだ？」
部室に連れて来るって案を出したのはお前だろうが…
「知らんな、何時までも昔のことを穿り返していると直ぐに老化が訪れるぞ」
今さっき、午前中の面倒は誰が見たとかぬかしてなかったか？
「だから知らん、いいから午後はお前が面倒を見ろ、それじゃあな」
そう言うと姉貴は無駄に長い金髪をたなびかせバタンと扉を閉めて出て行った。
取り残されたのは俺と泪乃の二人…いや一人と一匹だ…
「はぁ～…参ったね、こりゃ」
俺はパイプ椅子に座り直すと泪乃を見てそう愚痴を零した。
泪乃はと言えばよく日が当たる場所に移動して
日向ぼっこをしているのか体を丸めて寝ている。
第一の難関は「あいつ」との遭遇だよな…どう考えても……
俺はポットからお茶を注ぐと一口飲んで
屈託の無い笑顔を浮かべる黒髪の見た目は美少女、を思い出した。
「俺の周りに普通の美人は現れないものなのかね…」
一人ごちて見たが俺の周囲の取り巻く環境が急に変わるなんてあるはずもなく。

問題の放課後は直ぐ側まで足跡を響かせながらやってきた。

捨て犬拾いました（後書き）

ちなみにキーワード５の腐女子は２話から、６の幼女は４話から出てきます。

文学腐女子「冠凪ひとみ」（前書き）

幼女出てくるの3話でって言ってたけど
勘違いでした、すいません（，・д・、）

文学腐女子「冠凪ひとみ」

キーンコーンカーンコーン。

放課後を知らせる学校のチャイムなどどこも同じようなもので
うちの高校も例外なく普通のチャイムが鳴り響き生徒たちに
午後の安らぎを伝える福音がごとく鳴り響いた。

だが、今の俺には物凄い不幸な音に聞こえる。

例えるならそうだな、
嘘をつきすぎたと自覚してるやつがこれから閻魔大王に直に会うよ
うなそんな心境だ。

…すまん、わかりにくかった。
とにかく不安だったんだ。
もうじきやってくるであろう、
文芸部随一の大問題児と汨乃との鉢合わせについて本気で頭を悩ま
せているからな。

ダッダッダッダッダッダ！

部室内からでも聞こえる威勢のいいこの足音。
間違いない、「あいつ」だ。

ダーン！！

勢いよく、部室の扉が開いた。

「やー、遅れましたぁ！せ・ん・ぱ・い！！」
びくっとその声に反応して泪乃は声の主を見る。
声の主も何者？という顔で泪乃を見た。
そして、その黒髪ショートヘアーの美少女
…冠凪ひとみの第一声は次の通りだ。
「も…萌えーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」
予想通りの反応だ…
「キャー！何この可愛いの！！先輩のラ・マン！？」
「何故に俺の愛人か…」
人の話を聞かずにひとみは泪乃に頬ずりしている。
「犬のコスなんてマニアックー、
ねね、君、百合はイケる方？ＢＬは？好きな作品のカップリングは？」
「わふっ？」
「わふっ？だって！犬に成りきってるー！！」
そう言うとギューっと泪乃を抱きしめるひとみ。
「はいはい、もういいから」
そう言うと俺は泪乃とひとみをひっぺがした。

「あーん、もう先輩、ひょっとしてや・き・も・ち？」
「んなわけねぇだろ」

いきなりテンションマックスで登場したこいつは冠凪ひとみ。
黒髪で大体肩より少し短い程度に抑えられたショートカットからの第一印象は活発な女生徒。
そしてうちの高校の一年で文系成績がダントツの歴代１位で合格。
その代わり理系は駄目らしい。
そこまではいい。

問題はうちの部に仮入部したときの発言だ。
「あたし、冠凪ひとみです！小説ジャンキーで雑食です！
好きなジャンルはＢＬが一番、百合が二番、あ、ノーマルももちろんいけますよ！」

とんだ変態が来たもんだ…。
それが俺のひとみと会った時の素直な気持ちだ。
そういうのが読みたいなら１８歳以上になってから
秋葉原に好きなだけ行ってくれという俺の再三の忠告をこいつはたった一言。

「絵じゃ萌えないんです、あたし、活字じゃなきゃダメなんです！」
と言ってのけた。

その後も延々と俺の説得は続いた、が一向に説得に応じる気配が無い、どころか。
ある日のことだ。

「先輩、そんなにあたしのこと気を使って…ひょっとしてあたしに

気があるんですか？」
「はっ？」
予想だにしない回答が返ってきた。
「いや～ん、実はあたしも一目見た時から先輩いいなぁって思ってたんですよ」
「いや、あのな…」
「あ、初めての時はどうしましょう、先輩×あたし？あたし×先輩で行きます？」
「何の話をしているんだお前は！！」
と、その日から何故か毎日毎日俺に懐いてくるようになった。
今、羨ましいとかそういう思いを廻らせた奴、ちょっと変わってみろ、
現実になったらそうとうしんどいぞ。
そりゃ見た目は確かに美少女だが中身は恐ろしいまでに変態だからな。
言っておくが俺は普通だ。
こんな変態と一緒にされては非常に困る。
「先輩先輩」
「何だ」
「あたしの説明、ちょっと酷いです」
「何がだ、ほとんど合ってるだろ」
「あたしは変態じゃないです、超変態です」
「あぁ…そうかぃ…」
もう溜め息しか出なかった。

「あとテンションマックスじゃないですよ、あたしのテンションマックスはこんなものじゃないです」
すりすりと俺の腕ににじり寄ってくるひとみ。

「いつかそれは先輩のベッドの中で…」
「そうか、それは残念だ、一生見ることが出来ないからな」
「がーん」

一々大げさなポーズを取ってよろよろと崩れ落ちるひとみ。
泪乃がてこてことひとみに近づくとペロリとひとみの頬を一舐めした。

「こらっ、泪乃！」
「わんっ」
「泪乃ちゃんって言うの、君…可愛いねぇ、どれ、あたしにその身を全て預けてみ・な・い？」

そう言ったひとみの脳天をスパーンとスリッパが直撃した。

「やめんか、ド変態」
右手にひとみを叩く専用のスリッパを持ち姉貴が体操服姿で仁王立ちしていた。

「姉貴」
「いった～い、何するんですか、部長～」
「神聖な部室で変態行為を自重しろと何度言ったらわかるんだ」
姉貴は腕を組んでひとみを見下した。

「あぁ…部長…その目、そして何故かの体操服姿…あたしぞくぞくしますぅ」

もう一発、今度は顔面にスリッパが入った。

「あだー！」

「次言ったら殺すぞ、ド変態」

「はぅん」

言葉責めで感じてるのか…真性の病気だな。

「先輩、病気じゃないです、性癖です」

別に真面目に突っ込まなくてもいいだろ、そこは。

「ちなみにSも行けますよ、あたし」

そんなカミングアウトはしなくていい。

「あ、それより泪乃ちゃん、新入部員ですか？」

「え？あ、あぁ、まぁ…そんなところ、かな」

俺が言葉を濁すと姉貴が一言。

「うちの部のペットだ」と問答無用に切り捨てた。

「ペット？」

「こいつは人間じゃない、話すと長くなるがな」

と、今朝から今までの経緯を事細かにひとみに話す姉貴。

「ほぇ～…そんな摩訶不思議な生物がいるんですねぇ、どれどれ」

そう言ってひとみはピコピコ立っている泪乃の耳を触る。

「あぁ…凄い…感じちゃう」

「一々、変態チックな台詞を入れるな、ド変態」

「尻尾も本物なんですか？」

「ああ、尻と同化してやがるんだ」

そこでひとみは驚愕の表情で俺の方を見た。

「先輩！泪乃ちゃんのお尻を見たんですか！？生で！！？」

「あ、あぁ…」

思い出してちょっと赤面する俺。

「泪乃ちゃんばっかりずるい！あたしのお尻も…」

スパコーン！本日三発目のスリッパがひとみの脳天に入る。

流石にハイペースだな、今日は。

「でも夜とかはどうするんですか？夜中に脱走するかもですよ？」

頭を両手で押さえながらひとみが姉貴に聞いた。

「ふむ…そうだな、夜は校舎内は鍵がかかるから逆に安全だと思うのだが」

姉貴が腕を組んでそう言うとひとみは全力で首を横に振って

「いやいや、警備員のおじさんとかに見つかったらヤバイですって

！襲われちゃいますよ！！」
と言った。
いや、警備員の仕事はその行為をする奴を捕まえることだろ…
「ふむ、確かに、夜中に一人でむさ苦しい親父が
こんな可憐な雌犬を見たら突然欲情するかもしれん…」
お前ら、一度警備員に謝れ、全力で。
「あたしなら確実に襲います」
お前の意見は聞いてない。
はいはーいとひとみが手を上げる。
「どうでしょう？夜はあたしの家で預かるっていうのは！？」
「今さっき確実に襲うと言った口から出た言葉か、それは？」
「あ、やだなー、実際には襲いませんって…多分」
多分って何だ、多分って。
「姉貴、やっぱ夜はうちに連れてった方が安全じゃないか？」
「ふむ…」
そう言うと姉貴は顎に手をあてて考え込んだ。
「そう…だな、父は寛容だから問題ないかもしれんが母がな…」
姉貴の言葉に生粋のイタリア人主婦であるうちの母親の姿が瞼に浮かんだ。

「いや、でも別に友人を家に泊めるとか言えば…」
「母が恐ろしい程にリアリストなのは知っているだろう？」
「…そりゃ嫌ってほどに」
「泪乃の正体を知ってみろ、何をするかわからんぞ。
良くてテレビ局に売り込み、悪くてＮＡＳＡに頼んで生きたまま解剖だ」

また生きたまま解剖されるのかよ……

「それが未知の生命体の運命というものだ」
そこまで言った姉貴が。

「…何だ、黙って私の部屋に上げとけばいいんじゃないか」と、掌にぽんっと手を乗せて言った。
「勝手に入られたらアウトじゃないですか～？」
「私の母はそんな姑息なことはしない」
同感だ。
母さんは俺や姉貴の部屋に入る時間帯を事細かく決めてる上に入るときには必ずノックを3回した上で返事が返ってこない限り絶対に侵入しない。

大和撫子もびっくりするほどだ。
ちなみに日本語もかなり変だ。
どう変かって言うと必ずどんな言葉でも敬語を使う。
しかもかなり間違って。

例にとって言えばトイレを上げよう。

普通はおトイレ、とかお手洗いとかになるところを、
「お厠」というもはや新しい単語として認められるんじゃないかと

いう言葉にする。

日本に来たときに参考にした辞書が相当古かったらしいのが原因だと言っている。

姉貴はそんな母さんを見て「ああいう日本語は間違っている」と言って必死に純文学からラノベ・エッセイからどうでもいい雑学本にいたるまでありとあらゆる書物を読み漁った。

結果が今のイタリア人文芸部部長という位置づけだ。

多分、純日本人の俺より日本語に詳しいぞ、姉貴。

「バカが物を知らなさ過ぎるだけだ」

姉貴はこほん、と咳払いを一つ。

「とにかく、夜は家で預かるとしよう、泪乃を連れて行動するときは慎重に行動しろよ」

そう言うと俺たちは泪乃をちらりと見た。

泪乃は俺たちの話が長いのに飽きてきたのか大きく欠伸をしている。

そしておもむろに手で顔を擦り始めた。

「あ、顔洗った、明日雨ですかね」

「それは猫だろう…」

「とりあえず今日のところは解散するぞ、ド変態もバカもくれぐれも他言はするな、顧問の黒沢にもまだ内緒にしておけ」

「副部長とコウちゃんはどうするんですか？」
「あの二人には会った時に随時説明していく」

「田辺はともかく、章太郎は厄介だな…」
「うむ、この部の唯一の常識人だからな」

おい、俺の存在忘れてないか？

「バカは煮ても焼いてもバカだろう、
それに比べて章太郎のやつはまだ一般常識を持ってるからな」

俺も常識くらい持ってるぞ。

「本当に常識を持ってる奴は変態には好かれん」
「そ～そ～、あたし、副部長苦手なんですよ～、先輩、安心しましたぁ？」

するかっ！逆に腹立たしいわい。
そんな感じで泪乃は昼は部室、夜は姉貴の部屋で過ごすことが決定した。

休み時間ごとに必ず誰かが見に来ること、
他の生徒や先生に決して悟られないようにすることなどを姉貴は細かく指示すると今日はめでたく解散の運びとなった。

泪乃の食事

かくして俺と姉貴は泪乃を連れて散歩、じゃない、家に帰ることにした。
泪乃は深い帽子を被らされて尻尾は無理やりスカートの中に押し込まれたまま
姉貴に引きづられるように商店街を歩いていた。

「いいか、泪乃、絶対に吼えるなよ」

「わふっ」

姉貴の言葉に泪乃は元気に吼えた。

「それを止めろと言っているんだ、駄犬」

「く～ん」

泪乃はさも
「申し訳ありません、ご主人様」
と言った様な目で姉貴を見た。

「なあ姉貴」
「なんだバカ」
「泪乃のご飯とかどうすんだ？」

そこで姉貴が立ち止まった。
左手は泪乃の右手を離さないまま右手だけを顎に持っていく。

「ふむ…餌のことをすっかり忘れていたな、そもそもこいつは一体

何を食べるんだ？」
そう言ってマジマジと泪乃を見つめる。
「見た目は人間だからな…普通のご飯でいいのだろうか？
いや、体の構造関係が犬だったとしたらネギ等は不味いな…」
「とりあえず火の通した肉でも与えておけばいいんじゃないのか？」
俺がそう言うと姉貴は心底人をバカにした目で見て鼻で笑うと
「バカは何も考えずに発言するから困るな、それでは栄養が偏るではないか、
泪乃は見てくれがこれだからまだ私たちに拾ってもらえたが
これが力士のようにマルマルと太っていては貰い手がつかないだろう」
とりあえず想像力が低い俺にはデブった泪乃の姿なんぞ絵にすることも出来ず
「そんなもんかね」と呟いた。
「はっ、流石世界一出来の悪い弟だ。いいか？
こいつは愛玩犬の要素を持つから拾ったのだ。
ただ餌を貪り、惰眠を繰り返し、ピザのように太ったら即刻私は捨てるからな」
「それはちょっと酷くねぇか？動物愛護の精神に反するだろ」
姉貴は何故か誇らしげに「動物愛護の前に私の精神に反するのだ」
と言ってのけた。
はぁ、さいですか。

「やはり野菜中心で尚且つ少量、肉を与えるのがベストだろう。
炭水化物は駄目だな、カロリーが高すぎる」

そう言うと姉貴は片手で器用に鞄を開けると中から
紙とペンを取り出して口にペンのキャップを加え
キュポッという音とともにペンのキャップを外す。

「おいバカ、この紙を持て」
俺は姉貴から紙を受け取ると姉貴はその紙にすらすらと綺麗な文字
を書いていった。

「よし、完成だ」
「なんだこれ？」
「見て分からないのか？何たる無知だ。料理のレシピに決まってい
るだろう」

そんなものは見ればわかる。
それでこのレシピがどうだと言うんだ？

「はぁ…今、お前の姉さんは自らの弟の余りのバカさ加減に思わず
泣き出しそうになったぞ」

姉貴は片手で顔を押さえながら本当に哀れみの念を込めて俺を見た。
いいから続きを言え。

「今夜からの泪乃の餌のレシピに決まっているだろ」

それを何故俺に渡したままにする？

「お前が作るからだ」

あー、成る程、そりゃわかりやすい。
ってちょっと待て。
俺が作るのか？
泪乃のご飯を？

「何か問題があるか？」

姉貴は俺が料理をしているところを一度でも見たことがあったか？

「あるぞ、あれはそう、小学校の家庭科の調理実習の時だった。
とあるバカが目玉焼きを作ろうと豪快に卵をテーブルに叩きつけて
そのまま粉々に粉砕したな」

そのとあるバカって誰だか覚えているか？

「もちろん覚えているぞ、とあるバカ」

姉貴は自信たっぷりに俺の肩を叩く。
なら何故そんな俺にレシピを渡す！？

「私は忙しいんだ、飼い主ならペットの餌くらい面倒見ろ」

そもそも泪乃を最初に拾ったのは姉貴じゃなかったのか……

「大体だ、お前はいい加減バカから位を上げたくはないのか？
これはいいチャンスだ、そのレシピを忠実に作って私の中の株は急
上昇。
花丸を上げてもいいだろう、バカと呼ぶのを止めてやってもいいく

らいだぞ」

その話はどこまで本当なんだ。

「私は何時だって本当の事しか言わないぞ」

「…わかったよ、やるだけやればいいんだろ」

諦めたかのように俺が呟くと。

「いい返事だな、弟よ、流石は私の弟だけの事はある」

と姉貴は少々芝居染みた口調で言った。

手の平返したように褒めなくてもいい。

しかも「私」という部分を強調するな。

有り難味が薄れる。

「では私は先に帰って駄犬を部屋へと上げるミッションを敢行する。

食材の調達は任せたぞ、弟よ」

そう言って姉貴は泪乃の手を引いて去っていった。

ひゅ〜っと言う音が鳴って葉っぱが一枚、俺の足元を通過した。

傘に当たる雨粒の音がやけに大きく感じる

……おい、材料費は後でちゃんと出るんだろうな…

俺が帰り道のスーパーでレシピに目を通しながら野菜をカゴに入れていると突然携帯が鳴った。

何だ？
メールか？
確認する。
げっ、ひとみだ。

＝タイトル・あたしを食べて（ ＊´艸`）＝

＝本文・

先輩、泪乃ちゃんのご飯ってどうなりました？
あ、あたしですか？あたしは今先輩をおかずに
ハァハァしてますよ～、キャー！
先輩もあたしをた・べ・て♪

＝

と、ここで俺は何も言わず返信のボタンを押した。

＝タイトル・無し＝

＝本文・

今、泪乃のご飯を買ってるところだ、
後俺の受診フォルダを変態な文章で染め上げるのはやめろ。

＝

と、返信完了だ。

放って置いたら一日に２０通は変態な文章が送られてくる。
俺じゃなければ携帯会社と警察に連絡してストーカー被害を訴えているところだ。
俺はレジで会計を済ませるとそそくさと家へと帰った。

「ただいま〜」

そう言って靴を乱暴に脱ぎ捨てる。

「お帰りなさいませ、翔太様」

このバカ丁寧な応対をしてくれるのがさっきちらっと紹介した俺と姉貴の母さんだ。

姉貴と同じ金髪で赤い瞳をしていて年齢の割りに歳を感じさせない声と顔の持ち主。

「あらあら、翔太様、どうかなされたのでございますか？そんなにお買い物をなされておいでで…」

「いや、これは泪…じゃないや、ちょっと俺と姉貴の夜食分に…」

母さんは人形の様に細い首を少し傾けると

「左様でございますか、しかし翔太様、

言ってくだされば わたくしがお夜食などご配膳いたしましたのに」

「ああ、俺料理覚えようと思って、それでその練習がてらに、さ」

我ながら苦しい嘘だな。

だがその俺の台詞を聞いて母さんはパンと小さな両手を合わせた。

「まぁまぁ、翔太様がお料理を？これは大変喜ばしいことですわ。

あら、どうしましょう、お赤飯の準備をなさいませんと」

いや、そんな大層なものではないだろう…

「赤飯はいいよ、冷蔵庫に空きある？」
「はい、もちろんでございますわ」
そう言うと母さんは台所の方へと消えていった。
俺は冷蔵庫に食材を詰めると二階にある姉貴の部屋へと向かった。
「おい、姉貴、今帰ったぞ」
そう言ってドアノブを回す。
「あ、こら、まだ開けるな…」
「…えっ？」
そう言って見た俺を待ち受けていたのはパジャマ姿に
泪乃を着せ替えようとしている姉貴の姿と素っ裸の泪乃の姿…
「あ、いや、これは、不可抗力というか…その…」
俺は慌てて弁論しようとする…が、時既に遅し
「言い訳をする暇があるなら…早く、出て行かんか、この色魔が！」
姉貴のベッドの上にあった枕が唸りを上げて俺の顔面へと直撃する。
俺は枕を盾にしたまま泪乃の方を見ないようにそのまま部屋を出た。
あー、びっくりした。なんでもうパジャマ着せようとしてるんだよ。
「おい」
しかし…泪乃…結構胸あるな……
「おい、色魔」

「何だよ…もういいのか？」
「ああ」
俺は枕を顔から外すと姉貴の部屋に入った。
泪乃は淡いスカイブルーのパジャマを見に纏っていた。
「全く、お前がド変態の仲間だったとはな」
「さっきのは事故だ」
「五月蝿い、黙れ色魔」
くそっ、何だこの扱いは…
泪乃のご飯作ったら格上げするんじゃなかったのか？
「しただろう、バカから色魔へと」
心なしか下がってるように思えるんだけどな。
「黙れ色魔」
見る目もかなり冷ややかなものに変貌している。
…これは不味いな。
「あー、こほん、それじゃあ、泪乃のご飯作ってくるわ」
「早くしろよ、レシピ通りに作らないとまたバカに降格だぞ色魔」
いっそのことバカの方がマシな気がしてきたぞ。
そう言うと俺は台所へと降りていった。
ふむ…まずはキャベツの千切りか…
俺はキャベツをごろんとまな板の上に置くと包丁を右手に握り締める。
母さんがおろおろと俺を見ているがそんな場合じゃない。
俺の名誉がかかっているのだ。

「はあああああああ！！」

俺は気合を入れるとキャベツを一刀両断した。

「……」

わかってる。
千切りだろ。
やり方は確か前に母さんがやったのを記憶している。
半分に切ったキャベツを剥いて、細かく切っていくんだ。
そのくらい俺にだって出来るぞ。

トントントン。

ほら、見ろ。
「まぁまぁ、翔太様、何をお作りになられるのかしら？八宝菜ですか？」
……オカシイな…俺は千切りのつもりだったんだが…
八宝菜というのは確かキャベツが四角形じゃなかったか？

…わかってるよ。
ああ、明らかに太いよ、この千切りは。
大丈夫、太い分には問題ない、更に切ればいいんだからな。

トントントン。

「あらあら、翔太様、甘藍を微塵切りにする発想を思いつくなんてもしかして初めて料理するのにもう新しいレシピの開発でございますか？」

ぐっ…どうやら今度は細かく切りすぎたようだな
…まぁ、腹に入れば同じだろう。
次だ次。
何々、ササミを炒める…か。
ん？味付けしたら駄目なのか…姉貴の字で犬に濃い味付けは厳禁だ。
とメモ書きがあった。

なるほどね。
俺はフライパンに油をしいて熱するとササミを放り込んだ。

「翔太様？何故調味料を入れないのでありますか？」
母さんが思ったことを素直に疑問にした。
まぁ、そりゃそうか。
「あ、いや、これは、そう、姉貴がダイエット中なんだ。
それで極力調味料は使わず素の味をと思って…」
「まぁまぁ、シモーナ様がおダイエットを？
あの子、おダイエットをするほどお太りになられていたでありましょうか？」

はて？という風に母さんは首を傾げた。

「あの年頃の女なんてみんな体重気にするんだろ、例えそれが適正体重かそれ以下でもだ」
「あぁ、そうですわね、お母様にも多分にご理解できる所存でございますわ、
思い出します、若かりしあの頃の美しい思ひ出たちを…」

なにやら母さんは自分の若い頃を妄想しているのか夢を見ているような顔をしてぼーっとしている。
時折俺はこの人がリアリストなのか夢見る乙女なのかわからなくな

る。
まぁ前者が正解なのだがな…
一度うちの母さんを見てみるといい。
妙ちくりんな言葉使いと年齢に合わないその容姿とで
どちらが本当の母さんなのか混乱すること請け合いだ。
特に姉貴と並べられると姉貴が親で母さんが子供に見えることもある。

俺は焼いたササミと粉々になったキャベツを持って二階へと上がっていった。

「…おい、なんだこれは？」
姉貴は俺の渾身の力作を指差すとそう言った。

「何ってレシピ通りだろ」
「…まぁ百歩譲ってササミはいいだろう、だがこの生ゴミは何だ？」
「……キャベツの千切りだ」
「冗談は頭の中身だけにしろ、バカ」

お、バカに戻ってる。

「そんなことで喜んでいるんじゃない、どうしようもないバカだなお前は」
「まぁ、腹に入れば一緒だろう、どうせどっちも生のキャベツだ」
「ん…まぁ、そうだな」

姉貴が渋々納得するのを見て俺はほれ、と粉々のキャベツと所々焦げたササミを泪乃の前に置く。
泪乃は目を輝かせて
「わん！」と吼えるとササミに貪りつこうとした。

その時、姉貴の右手のひらが泪乃の顔面に止まる。
「…何やってんだ？」
「くぅ～ん？」
泪乃はよだれをじゅるじゅるとたらさんばかりの勢いでササミとキャベツを見ている。

「可哀想だろ、食わせてやれよ」
俺の言葉に姉貴は俺の顔も見ずに
「黙れバカ、躾は最初が肝心なんだ」と言った。

「…躾？」
「そうだ、今まさに『待て』を躾けているところだ」

泪乃はまだ～と言う顔で尻尾をばたばた震わせて姉貴を見つめている。
姉貴の無言の迫力と手のひらの圧力に負けたのか今度は泣きそうな顔で俺を見てきた。

そんな顔で俺を見るな。
…まだか、いい加減いいだろう、あぁ、もうそんな顔で見つめるな泪乃！

「なぁ姉貴、そろそろいいんじゃないか？」

俺は泪乃のまだかな？光線全開なその瞳に負けて姉貴に催促をしてやる。

「ん…もう2分くらい経ったか？」
「経った経った」

「ふむ、初めはこんなものか、よし泪乃、いいぞ、食べろ」
「わんっ！」
泪乃は嬉しそうに吼えると顔をそのまま食器に突っ込んでササミを食べ始めた。
「…しかし体は人間でも本当に犬だな」
「ふふふ、今に見ていろバカ、私はこの駄犬を日本一、いや世界一利口な名犬へと育ててやる」
「ほぅ」
姉貴の目は意外にもマジだった。
「とりあえず基本的な躾から始めて最終的には字を書けるようになるのが目標だな」
「字！？」
「何をそんなに驚いている？」
「いや、だって確かに見た目は人間だが泪乃は犬だぞ？」
「人型二足歩行犬という時点で一般的な犬の常識は遥かに逸脱している」
そりゃあ…そうだが…
「とりあえず…早急に箸の使い方は教えないといかんな」
姉貴はカーペットにぼろぼろと毀れたキャベツとササミの残骸を見て盛大に溜め息をついた。
…と、もうこんな時間か。
「じゃあ、俺はもう寝るぞ」
「ああ」

「ちゃんと鍵閉めて寝ろよ、用心するに越したことはないからな」
「誰に物を言っているんだバカかお前は」

姉貴の呆れ果てたような声を尻目に俺は自分の部屋へと戻った。
携帯のアラームをセットしてパジャマに着替え、ベッドへと潜る。

ちなみに携帯を見るとひとみから変態メールが5件届いてた。
全て千文字を超える大長編のオリジナルエロ小説だった。
しかもBL物。
こんな物送ってきて何が楽しいのか、理解に苦しむね。
華麗に全部スルーすると俺は深い眠りへとついた。

チュンチュン…ドタドタドタドタ！！
何だ、随分騒々しいな…雀のさえずりに混じって駆け足の音が聞こえるぞ。
バタンと俺の部屋のドアが盛大に開く。

「大変だ！泪乃がいな…っ！？」
「んぁ…なんだっ…！？」
「くぅ～…すか～…」

俺の隣で泪乃が丸まって寝ていた。

「貴様…夜中に私の部屋に忍び込んで泪乃を連れ込んだのか…」

姉貴は右手の拳を思いっきりぐーに握ってわなわなと震えている。

「いや、待て誤解だ、泪乃が勝手に…！」
「黙れこの大バカ！泪乃が勝手にドアの鍵を開けるわけが無いだろう！！」

「鍵の掛かった部屋にどうやって侵入するんだよ！俺は平成の大泥棒かっ！？」

俺たちの口論で目が覚めたのか泪乃が大きく伸びをする。

「わふっ！」

そう言うと泪乃は俺と姉貴の頬をそれぞれ一舐めして元気良くベッドから飛び降りた。

見た目も頭脳も幼女「田辺光」（前書き）

全国のロリコンのみなさん、おまたせしました（え

見た目も頭脳も幼女「田辺光」

泪乃が来てから４日が過ぎた。
放課後の部室。

俺と姉貴はじっと泪乃を観察している。
そこへ、実に１週間ぶりにやってきた部員がいた。

ガチャッと部室のドアが開く。

「やーやー、やっとかぜなおったのだー！」

ドアを開けて陽気に入ってくるその部員を無視して俺と姉貴は泪乃を見続ける。

「おーい、ぶちょー、せんぱーい、こうがやってきたぞー」
「五月蠅い、黙れ、幼女」

姉貴は一言で切り捨てると泪乃の観察へと戻った。

「ようじょいうなし！こうはこうこういちねんせいなんだぞ！！」
「ああ！？」

姉貴が声の主に振り向くと凄みを利かせて睨みつけた。

「ひぃっ！？ご、ごめんなさい」
「おい、姉貴！」
ぷるぷると震えだした泪乃を見て俺は叫んだ。

「来たか！？」
「わんっ」
泪乃はもう我慢出来ないとばかりに吼える。
「よし、トイレだな、こっちだ、泪乃！」
そう言うと姉貴は泪乃を連れ出して女子トイレへと猛ダッシュした。
ここ数日の日課、トイレの躾、だ。
見た目が可愛い女の子だからこれを最初にやろうと言い出したのは姉貴だった。
確かに、ぱっと見美少女にしか見えない泪乃が片足を上げて、小便をしてる様はあまり見たくないからな。
無難な躾だと俺も思った。
と、いうわけで姉貴とひとみが交替で泪乃を観察して、トイレに行きたいそぶりを見せたら女子トイレへと連れ込む。
え、何で俺が参加してないか？
……わかれよ、女子トイレになんか入れるか。
とにかく、そんな日々が続いている。
「うぅ…こうはいらないこなんだ…」
「ん？何だ、田辺来てたのか」
「いまごろきづいたー！」
そう言うと目の前の小学生、じゃない、これでも高校1年だ。
田辺光（たなべこう）、15歳。

恐ろしく童顔で背も１３２ｃｍしかなくどう贔屓目に見ても
８歳くらいにしか見えないが本人はいたって大人の女性のつもりで
ある。
少しでも大人になろうと思って無理に染めたであろう栗色の髪の毛は
腰まで伸びていて軽くウェーブがかかっている。

しかもおつむが弱い。
決定的なまでに。
それはもうよくこの高校に入れたものだと感心するほどに。

「こうはあたまわるくないぞっ」
「全部ひらがなで喋る人間のどこに知性を求めろと？」
「むー！だから、かんじをおぼえるためにこのぶにはいったのだ」
「はいはい、良い子だから大人しく本でも読んでろ」

俺は田辺の頭を軽く撫でるとそう言った。

「ふぁ…うん、そうするのだ」
田辺は気持ち良さそうに目を瞑ると大人しく読む本、田辺の読む本
は絵本か童話だが、を探し出した。

「あ、そだ、せんぱい」
お気に入りの絵本のタイトルを探しながら田辺が質問してきた。

「何だ？」
「さっきのおねえさんはだれだー？」
「お姉さん…？」
「ぶちょうがひっぱってたやつだー」
「ああ、泪乃か…」
「しんにゅうぶいんかっ！？こうのこうはいかっ！？」

「残念だが違う」
「むー、じゃ、だれだ？」
田辺は膨れっ面になると俺に問いかけた。
「うん、話すと長くなるんだがな…」
俺は田辺クラスのおつむでもなるだけわかりやすく出来るだけ簡潔に要点だけを説明した。
「えー！？じゃ、じゃあ、あれはわんちゃんなのか！？」
大きな瞳を丸くさせて田辺は驚愕した。
「そうだ」
「でもひとのかたちをしてるぞ！しかもびじんさんだ！！」
「そうだな」
「ふしぎだー」
「いいか、田辺、この事は誰にも言ってはいけないぞ」
俺は小学1・2年の児童に諭すように言う。
「なんでだ？」
田辺は不思議そうな顔をして聞き返してきた。
「そりゃ、お前、あんな不思議犬がいることがわかったらパニックになるだろ」
「おー、そうか、うーん、でも、はなしたいぞ」
「大人は普通、話さないんだ」
「むむ…そうか、おとなははなさないのか、じゃあこうもがまんする！」
田辺はこの大人だから何々はしない、あるいはする。というフレーズに弱い。

「よし、良い子だ」
そう言うと俺は田辺の頭を撫でる。
「ふぁ…」
ついでに言うと田辺は頭を撫でられるのにも凄く弱い。
8歳でもまだ年上な気がしてきたな
…5歳児並みか？

「コウちゃーん」
その時、田辺の後ろからにょきっと手が出てきて田辺をぎゅっと抱きしめた。
「もう、1週間も休んで心配したんですよ～、はむっ」

ひとみだった。
ご丁寧に田辺の耳たぶを甘噛みしてやがる。

「ふあああああ！！で、でたなぁ、かんなぎひとみっ！！！」
「何ですか、そんなに嫌がらなくてもいいじゃないですか」

田辺は小さな手足をブンブン振り回しながら必死にひとみの腕の中でもがく。

「ふふふふふ、コウちゃんの体はもうあたしのものなのです」
「やめろー！こうはまだじゅんすいなのだ！おまえとはちがうんだっ！！」
「手取り足取り、いい事を教えてあげますよ」
「いらーん！！たすけてくれ、せんぱーい」
田辺はそう言うと潤んだ大きな瞳で俺に哀願してきた。

仕方ないので俺はひとみの腕を田辺から引き剥がす。
「あーん、先輩、何故に邪魔を…はっ、嫉妬？」
「馬鹿」
「はぅん、今あたしは心に１００のダメージを受けました」
「ほう…それはいい事だな、馬鹿馬鹿馬鹿」
「はぅはぅはぅ！」

…俺がバカみたいだから止めておこう。
それにこれはダメージを受けてる顔じゃない、むしろご褒美を貰って喜んでる顔だ。

「いやいや、やっと泪乃も女子トイレのマークと便器を認識したな」
そう言いながら姉貴が泪乃を連れて戻ってきた。
「泪乃ちゃん、昨日あたりからおしっこしたくても我慢するようになりましたよ」
とひとみが泪乃の頭を撫でながら言った。

「うむ、中々どうして利口だったな、犬の躾というのはもっとかかるものだとばかり思っていた」
「なんだー、るいのはひとりでおしっこにもいけないのか、こどもだな、はははははは！」
「まあ犬だからな、お前は一人で行けるのか？幼女」
心底田辺をバカにした目で見ると姉貴はそう言い放つ。

「い、いけるもん！こうをばかにするとぶちょうでもゆるさないぞっ！」
「はっはっは、そういう台詞は夜中に一人でトイレに行けるようになってから言え」
そう言いながら姉貴は田辺の頭を軽く小突く。

「いけるったらいけるもん！」
ぷくーっと頬を膨らまして怒りを顕わにする田辺。
しばらくそうしていたが何を思ったのか田辺は急に膨れっ面を元に戻すとまるで青い狸型ロボットが歩くときの効果音を出すような歩き方をして泪乃に近づいた。

「るいのー、おてをしろー！」
そう言って泪乃に手を出す。
が、泪乃はじっと田辺を見た後にふんっとそっぽを向いた。

「むがーっ！なんでおてをしないんだ、おまえわんちゃんだろっ！？」

「ぷっ…」
ひとみが思わず顔を背けて噴出す。

「犬は自分より強い者に従い弱い者を見下す習性があるという。貴様は今、泪乃の中で最もランクの低い者として認識されたのだ、幼女」

姉貴が哀れみの念を込めて田辺にそう言った。

「な、なんだ、むつかしいことばをつかってわけのわからないことを」

困惑する田辺。

「つまり、幼女は犬より下の立場になったわけだな」
「な、なんだとー！こうがわんちゃんよりしただというのかっ！？」

「ぷぷっ…コウちゃん、可哀想です」
「哀れとしか言いようがないな」

「くそー、るいのとかいったな、ばーか、ばかいぬ！」
「がるるるっ、あうっ！」
そう言って人差し指を突き出した田辺の指の先端を泪乃は容赦なく噛んだ。

「うあー！かまれたー！！」

田辺が噛まれた指を盛大に天井に向けて叫ぶ。
「こら、泪乃、人を噛んじゃ駄目だ」
俺はそう言って泪乃の頭を叩く。
「くぅ～ん」

「く、くそー、いまにみてろ、ばかいぬ！ぜったいにおてをさせてやるからなっ！！」
「わんっ！」
「ひっ」

泪乃が一吼えすると、田辺は高速で俺の後ろへと隠れる。
俺のズボンの裾を掴んでガタガタと震えながらそーっと泪乃を見た。

「お前なぁ…本当に高校生か？」
「こ、こうこうせいでもこわいものはこわいのだ…」
「あっはははは、コウちゃん、可愛すぎます…くくっ」
遂に我慢の限界に達したのかひとみが吹き出す。

「うむ、流石は我が部が誇るマスコット人形だ、ナイス仕事をして

いるぞ、幼女」
姉貴も何故か満足気に頷いている。
「くぅ～、み、みかたはせんぱいだけなのだ」
やれやれ…女三人寄ると姦しいな……
「だ、だいたいだ、ぶちょうもかんなぎひとみもおてできるのかっ！？
じつはできないんじゃないのか！！」
その田辺の発言にひとみが厭らしい笑いを浮かべて
「あたしがお手させることが出来たらコウちゃんあたしの言う事何でも一つ聞きますか？」と言った。
「いいだろー、のぞむところだっ！」
いや、田辺、お前この手に引っかかるの何回目だよ、いい加減学習しろ…
「泪乃ちゃん、お手」
「わうっ」
ひとみがおもむろにそう言って手を差し出すとまぁ、何とも素直に泪乃は手を差し出した。
「ぷぷっ…コウちゃんの体、ゲーット」
田辺の方を見てひとみがほくそ笑む。
「くぅ～…じゃ、じゃあぶちょうはっ！？」
「泪乃、伏せだ」

「わんっ！」

姉貴の命令に泪乃は元気良く吼えるとその場に寝そべる。

「ふ、ふせ！？そんなこうとうてくにっくまで…」

姉貴は自慢げに田辺を見下すと

「私にかかればこんなこと造作も無い、出来ないのは貴様だけだ、幼女」と言った。

「あぅぅ…せ、せんぱいはこうのみかただよな、な？」

くりくりとした瞳を潤ませながら田辺が俺を上目遣いで見る。

「…あぁ…えぇと…」

すまん、田辺。

流石に俺も泪乃に下には見られたくない。

「泪乃、お手」

「わふっ」

俺が手を差し出すと泪乃は立ち上がって俺の手の上に自らの右手を乗せた。

「う、うわーん、みんなてきだーーー！！」

田辺は泣きながら栗色の髪を翻し部室を出て行こうとする。

「待て幼女、逃げる気か、貴様は見た目だけではなく中身まで子供だったのか？」

姉貴の言葉に田辺の動きがぴたっと止まる。
ああ、また子供扱いされたことに何か思ったものでもあるんだろうな。

「こ、こどもじゃないぞっ！にげたりしない！」

…やっぱりな。

「ようし、よく言った、人間が舐められるといかんからな、お手が出来るようになるまでここにいろ」
姉貴が悪女の様な笑みを浮かべながらそう言った。

「わ、わかったのだ…るいの、おて」
がぶっ。
「ぎゃーーー！！！」
「そういや章太郎はまだ休みか？」
「ふ、ふくぶちょうならまだねつがあるからっていってたぞ…おて」
がぶっ。
「うあーーーー！！！」

俺の問いかけに手を噛まれながら田辺が言った。

「一番厄介なのが残っちまったな」
「うむ、果たして奴がこの現実を受け入れるかどうかが多分に心配だ」

結局一日経っても田辺は泪乃に同系列に見られることは無く、この日の部活は終了した。

「ふん、きょ…きょうのところはこれくらいでかんべんしてやるの

だ」
捨て台詞にも程があるぞ、田辺。

「わんっ」
「ひっ！あ、あしたおぼえてれよ、るいのーっ！」
「コウちゃ～ん」

後ろから田辺に抱きつくひとみ。
「な、なんだかんなぎひとみっ！？」
「さっきの約束、覚えてますかぁ？」

ひとみは田辺の頭を撫でながらそう言った。

「ふぁ…や、やくそく？なんだ？」
「お手が出来たらな～んでも言う事聞くってやつです」
「げっ…」

思い出したかのように田辺が唸るとひとみは問答無用で田辺を抱き上げた。

「さぁ、一緒に帰りましょうね～」
「うあー、はなせー、じんるいのてきー！へんたいー！」

そう言うとひとみは強引に嫌がる田辺を抱えたまま商店街の方へと消えてった。

「私たちも帰るか」姉貴がぽつりと呟く。

「そうだな、あの二人が揃うとこの上なく疲れるな」
「まことに遺憾だがそこだけはバカと同意せざるを得ないな、

何故うちの部には奇人変人しか寄ってこない？」
「部長がそもそも奇人変人だからじゃないのか？」
「殺すぞ、バカ、章太郎が出てこないと纏らん、早く風邪が治るといいのだが」

全くだ。
この集団を纏められるのは章太郎くらいのものだろう。
実質、顧問の黒沢だって姉貴が部長になってからというもの
関わりあいたくないとかいう理由で滅多なことで部に顔を出さないし。

「さぁ、それより帰るぞ、今日こそは泪乃に箸を使わせてみせる」
「無駄な努力が好きだな、姉貴…」
俺が呆れ果てたように呟くと
「ふっ、バカはこれだから困る、
お前は知らないかもしれないが昨日の夜、泪乃は箸をぐーで握ったのだぞ」

「マジか！？」

「私は何時でも大真面目だ、なぁ泪乃」
「わんっ」

泪乃は笑顔でそう吼えた。

文芸部の常識人

ドタドタドタドタ。
朝っぱらから五月蝿いな…
この足音は姉貴か…？
俺の予想通りの人物がドアを蹴破るかのごとく俺の部屋へと侵入してきた。

「おいバカ！起きろ！！」
「何だよ…まったく…」

異常なまでにテンションが高いな…
瞼を擦りながらベッドから起き上がる俺の腕を引っ張って姉貴は自分の部屋へと俺を担ぎこんだ。

「見ろ！」
姉貴が指差す方を見ると箸を器用に使いこなしてもぐもぐとご飯を食べてる泪乃の姿があった。

「…うそ、だろ？」

俺は瞬きを2、3度して再度、確認する。
…間違いない。何度見ても箸を使ってる。
しかも結構使い方が上手い。
姉貴と泪乃を交互に見て口を金魚のようにパクパクさせる。

「どうだ？バカ、これが私の躾の成果だ」
姉貴は心底偉そうにそう言い放った。

「…こりゃ、大したたまげた…」

俺は素直に感嘆の音を漏らした。
その日の放課後、部室で例の2人と文芸部最後の砦が真っ二つで意見衝突を繰り広げていた。

「だーかーらー、ほんとなのだ！」

両手をスカートの前へとぐーでやり子供の様に怒る田辺。

「絵本のような本ばかり読んでるからそのような幻想を見るんだぞ、田辺」
極めて冷静に男は言った。

「いや、本当なんですよ、副部長」
ひとみも負けずと説得を試みている。

「冠凪、お前も変な妄想ばかりしてるからそんな在りもしない出来事が見えてしまうんだ」
聞く耳持たない、とは正にこのことだろうな。

「むきー！しんじろ、るいのはわんちゃんでぶちょうとせんぱいとくるのだ！！」
田辺が両手を振り回して怒ろうとすると男は田辺の頭を軽く撫でる。

「あ、ふぁ…」
途端に大人しくなる田辺。

「本当に来たら、信じてやるよ」
男は田辺を沈静化するとそう言った。

「その言葉、本当だろうな、章太郎」
「む…シモーナか？」

男…章太郎はドアの方を見て姉貴を確認する。
「俺もいるよ」
一応、俺も目に入ってるだろうが自己主張しておいた。
「翔太、お前がついていながらこのザマは何だ、全員白昼夢にやられているぞ」

そう言ったこの長身の眼鏡は文芸部副部長、木崎章太郎。
俺と姉貴とは5歳の時からの古い付き合いでいわゆる秀才とかガリ勉とか、
そう言った言葉がよく似合う。

頭がいい上に顔もいい、神様はいつだって不公平なんだ。
先日まで風邪を拗らせて寝込んでいたようだがどうやらようやく治ったようだな。

「章太郎…こいつを見ろ」
そう言うと姉貴は自分の後ろから泪乃を差し出す。

「何だ、新入部員か？」
「こいつが幼女とド変態が話していた犬だ」
「……」

章太郎はマジマジと姉貴と泪乃を見た。
「お前はこういう冗談を言うタイプとは思わなかったけどな」

「私は何時でも本当のことしか言わん」
そういうと姉気は泪乃の被っていた深い緑の帽子を取った。
茶色い髪の毛から犬耳がピンと立つ。
章太郎は暫く考え込むと閃いた様に呟いた。
「……ほぉ、わかったぞ、お前らこれはドッキリだな？
お誂え向きにこんなコスプレ女まで用意して風邪だった俺をみんなで嵌めようと言うのだろう？」
「相変わらず頑固だな、貴様は」
「お前ほどでは無いけどな」
姉貴は無言で章太郎の手を取り、泪乃の耳の付け根に手をやった。
「……っ？」
一生懸命犬耳のアタッチメントを探す章太郎。
見つかるわけないぞ、本物だからな。
「…な、なかなか精巧に出来てるな、最近のこういうグッズは、す、素肌に直接取り付けるのか」
俺と同じ反応してやがる…
「副部長、素直に認めるのです」
「そうだぞー、るいのはわんちゃんなんだぞー！」
ひとみと田辺がここぞとばかりに章太郎を攻撃する。
まぁ、普段から章太郎にあしらわれてばかりいるこいつらにとっては今は絶好のやり返しタイム突入と言う訳だ。
まるでタイムセール時のおばちゃん連中の如く、勢い付いて章太郎を責める。

「わんっ！」
泪乃も一声吼えた。
「しかし、常識的に考えてそんな生物が存在するなんて有り得ない」
流石姉貴に常識人と言わせる男だけあって中々認めないな。
「貴様の頭の中は相変わらずガチガチだな。何でも自分の知識の中で片付くと思うな、
貴様の知らない世界が世の中には無限に広がっているということも知れ、それもまた勉強になるぞ」
無言で姉貴の言葉を聞きながら泪乃の顔を触る章太郎。
泪乃はくすぐったそうに「くぅ～ん」とか「わふっ」とか言ってる。
「…むぅ、仕方あるまい…忌々しいがどうやらシモーナの言うとおりらしいな。
まさかこんな生物が実在するとは…いつから世の中はファンタジーな世界へと突入したんだ？」
率直な疑問だな。
だから俺も率直に答えた。
「そんなこと、俺が聞きたいね」と。
「そもそもこいつ…泪乃とか言ったか、定義は何だ？人間か？犬か？」
まるで新しい研究素材を手に入れた研究員のように興味津々に泪乃を見て章太郎が呟く。

「わんっ」
「犬語しか話さないところや仕草などから限りなく人に近い犬だと私は予測している」
姉貴が自分の予測を章太郎に話した。
「ますますファンタジーだな」
「面白いだろう？中々頭もいい、今朝など箸の使い方をマスターしたほどだ」
「箸を使いこなすのか…それはもう犬ではないな」
ふと気付くと田辺が俺のズボンの裾を引っ張っていた。
「なぁなぁ、せんぱい、さっきからあのふたりはなにごではなしてるのだ？」
「…日本語だ」
そう言って俺は軽く田辺の頭を撫でる。
「ふぁ…、でもでもさっぱりいみがわからないぞ！」
「コウちゃんにはちょっと難しいかもですね～」
厭らしい目つきでぷぷっと笑いながらひとみが呟いた。
「だ、だまれ！かんなぎひとみっ！い、いみくらいわかるぞ、こうはばかじゃないからな！」
意地になるな、また来るぞ。
「じゃあ、どういう意味何ですか？お馬鹿なあたしに是非教えて欲

しいです」
ほら来た。そう言ってしゃがむとひとみは田辺に目線を合わせてにっこりと微笑んだ。
はたから見れば心優しいお姉さんが小学生に話しかけてるように見えるんだろうが、
内情を知ってると全く別物に見えるな。

「うぅっ…そ、それは…」
「それは？」

更に一見するとただの美少女以外の何者でも無いスマイルを浮かべてひとみは田辺に迫る。

「そ、そ、そ、そうなのだ、る、るいのがいぬだっていうことなのだっ！」
「ぶぶー、半分当たりで半分外れです」

そう言うとひとみは田辺の胴をがっしりと掴むとひょいと持ち上げる。

「うあー、なにするー！？」
「罰ゲームです」

ひとみは高々と田辺を上げるとその場でくるくると回りだした。

「ああーー！やめ、やめろーー！！めがまわるーーーーっ！！」
「あはははははっ、それそれ～、まだまだこれからですよ、コウちゃん♪」
「うあーーーーーー！！」

楽しそうにその場をオルゴールの様にくるくる回るひとみと田辺。
いや、楽しそうなのはひとみだけだな。
田辺はちょっと本気で涙ぐんでるぞ。
ふと見ると姉貴と章太郎はまだ泪乃が犬と人間どちらにより近いのかを議論していた。

「とりあえず人面犬という都市伝説があっただろう、あれに準じて人体犬というのはどうだろうか？」
「ふむ、悪くはないが、もっとこう格好いい名前の方がいいな。ヒューマノイドドッグとかはどうだ？」

心底どうでもいい話題だ。

「わふっ」
泪乃が俺の前に来て何かおねだりでもするかの様に吼えた。
思い出すと俺はズボンの中から一本のビーフジャーキーを取り出す。

「泪乃、待て」
「わふっ」

そういうと直立不動でビーフジャーキーを見ながら泪乃はじっとその場に立ち尽くす。

「よし、いいぞ」
「わんっ」

俺がそう言うと泪乃は満面の笑顔で吼え両手でビーフジャーキーを掴み食べ始めた。

「流石に箸を使うだけあって、一通りの躾は済ませてあるのか」

「うむ、その通りだ」
俺と泪乃の様子を見て章太郎が言うと姉貴が満足そうに呟いた。
「とにかくっ、全員揃ったからもう一度確認しておく」
姉貴がバンッ！とホワイトボードを叩く。
ひとみがその音に気付くと田辺を地面に降ろしてやり、
田辺は「め、めがーーーっ！！」とか叫びながら地面をよたよたと歩いている。
「何の確認だ？」
章太郎が姉貴に問いかける。
「泪乃の扱いについてだ」
そう言うと姉貴は泪乃に「来い」の合図を出した。
走って姉貴の下へと向かう泪乃。
「泪乃は未知の生命体だ、外部にばれると何をされるかわからん。
各自最大限の注意を払って行動してくれ」
姉貴は泪乃の頭に手を乗せるとそう言った。
「成る程、もし捕まったら生きたまま解剖などの処置がとられるかもしれんな」
うわっ、姉貴と同じ発想するか、章太郎。
「当然の予想だ、あとむさ苦しいスケベ親父などにも要注意だ」
「…それは言ってる意味がわからないな」
「本気ですか、副部長、泪乃ちゃんがむさ苦しい変態のおじさんた

ちに
見つかったら強姦されちゃうのです、世の中男はバカでスケベばかりなのです。
副部長や先輩のようなケースは珍しいのです」
「…俺は女でもスケベで変態なのを約1名ほど知っているんだが」
俺の呟きを耳ざとく聞いていたのかひとみは
「いやですっ、先輩ったら、そんなに褒めないでください」
なんて言って頬を染めていやんいやんと首を振った。
いや、これ褒め言葉じゃねぇから……
「取り合えずの注意点はそれだけだ、よし、久々に文芸部らしいことをしようじゃないか。
6月は泪乃に掛かりっきりで会報誌が作れなかったからな、7月の原稿に取り掛かろう」
「おー、こうはるいののことかくぞー！」
「それを止めろと言っている、幼女」
「えへへ～、じゃあ、あたしは、何時も通り新撰組の土方×沖田の小説を…」
「変態な内容は入れるなよ、ド変態」
「わかってますよ、部長の原稿チェックは厳しいのです。
Sで始まりXで終わる単語を使用しただけで没になりますから」
「当たり前だ」
そういや姉貴は変にそういうことに厳しいんだよな。

「私たちは健全な高校生なんだ、それに相応しい文章を書けばいい」
何を察したのか知らないが章太郎が姉貴に腕を回す。
ひそひそと小声で何か喋ってる。

「で、進展したのか、お前ら？」
「バ、バカ、私たちはただの姉弟だと何度言えば…」
「全く、そんなに性格が破綻してるのに何故そこだけそんなに生真面目なんだ、お前…」
「五月蝿いな、あのバカに言ったら殺すぞ」
「わかってるよ」

何言ってるんだ…？
全然聞こえん。
ただちょっと姉貴がきょどってる姿を見るのは久しぶりな気がするな。
章太郎以外姉貴は扱えないからな。
今度是非操縦方法をご教授願いたい。
いや、マジで、切実な話。
ともかく久々に5人全員が揃った俺たちはこれまた
久々に文芸部らしく月1の会報誌作りに勤しんだ。

実は結構うちの部の会報誌は校内で人気がある。
書かれている内容が普通の話題は俺と章太郎の二人だけで後は無駄に偉そうな目録と後付け、
そしてBL（月によっては百合の時もある）な小説と絵本か童話のような話だからな。

珍しい物見たさに貰いに来る奴がいるのさ。一通り作業が終わると俺たちは帰宅した。

最低顧問教師、黒沢！

7月1周目、
第3水曜日、
部室で俺たちがたむろしながら7月会報誌の作業をしていると
何ともまぁ懐かしい顔がやってきた。

顧問の黒沢だ。

はげで生徒からの人望がまるで無いという駄目先生を絵に描いたようなその禿沢
（ひとみが命名したものだ、いつの間にか全校に広まっていて
禿沢は今でもその犯人探しを熱心に行ってるらしい、目の前に犯人がいるとも気付かずに…な）が
部室にやってきた。

「うおっほん」

非常にわざとらしい咳払いでこちらの注意を引こうとする禿沢。

しかし、全員ガン無視だ。
なんでこいつが文芸部の顧問なんだろうな？
別に現国担当でも無かったぞ。
確か数学だ。
全然ジャンルが違うじゃないか。

「うおっほん！！」
もう一度、今度はさっきの3倍はあろうかという音量で咳払いをする禿沢。

「五月蝿い、黙れ」
姉貴が禿沢の方を見向きもせずにそう言った。

「うぐっ…あ、相も変わらずいい度胸だな、滝内シモーナ
…それに貴様らもだ、腐ったミカンどもめ！」
「あたしたちが腐ったミカンなら先生はトイレに落ちた携帯電話なのです」
ぴしゃりとひとみが言い放つ。

「くっ…口の減らない女め…冠凪ひとみ、いつか不純なところを捕まえて退学にしてやるからな！」

尖った口先を更に尖らせて禿沢がきーきーやかましく言った。
全く、こいつが来ると毎回何かしら事件というか諍いというか、それが起きていかん。

「で、何の用だ？貴様の様な知性の欠片も無い教師が本来来るべき場所では無いのだがな、ここは」

俺は心に思うだけだからまだマシな方だが姉貴は
こういうことをズバズバと全く何の遠慮も無く言えるな、ある意味ちょっと羨ましい能力だ。

やはり先日の何故文芸部には奇人変人しか集まらないのかと
いう答えは部長が奇人変人だから、な気がしてくるな。

「いやなぁに、新しい新入部員が入ったと風の噂を聞いて
顧問であるところのこの俺様がワザワザ用も無いこの腐った部の様子を見に来てやったんだ、

ありがたく思え、腐ったミカンども」

厭らしい心底下品な笑みを浮かべると禿沢はそう言った。
泪乃の事か…トイレかなんかの時に姉貴かひとみと一緒にいるところでも見られたか？
姉貴は特に動じることもなく
「ああ、新入部員か、いるぞ一人」
と言って昼寝をしている泪乃を指差した。

それを見た禿沢はこの上なく厭らしい笑いを浮かべると

「ほぅ…そいつか、中々上玉の、ごほん、いや可愛らしい生徒じゃないか」
とぐへへという効果音がぴったりな笑いを浮かべてそう言った。

「黙れはげピザ。死ね」
姉貴が汚物を見るような目で禿沢を見て呟いた。

「くっ…滝内シモーナ、それは教師への侮辱と受け取るぞ」

「私は教師を侮辱しているのではない、貴様個人を侮辱しているんだ」

姉貴は作業を黙々とこなしながら極めて冷静にきっぱりと言った。

「ぐぅ…こ、これだからこの部活に来るのは嫌なんだ…」
ブツブツと文句を言う。
嫌ならさっさと出てけばいいのに。

「なぁなぁ、はげさわ」

「なんだい？光ちゃん」
田辺の言葉に禿沢は途端に笑顔を取り戻すと気持ち悪い女座りをして田辺に視線を合わせる。
そう、更に気持ち悪いことにこの禿沢、ロリコンである。
というか余ほど性格が悪くなければ女なら誰でもいいらしい…という噂が流れている。
出所は…言わなくても分かるだろ？

「コウちゃんに下品な顔で近づかないでください、先生」
「だ、黙れ、冠凪！下品さなら貴様もいい勝負だろうが！」
ぴくっとひとみのこめかみに青筋が立ったように俺は見えた。

「同じ…？この、あたしの崇高な妄想と貴方の様な下品でお下劣でいつも女性の穴の中に入れることしか考えてないような貧弱な考えが同じだと言うのですか？」
いや、ひとみ…今の発言からはすまないが全く同じに聞こえなくも無いぞ。

「黙れっ！同姓だろうが何だろうがいける貴様の方が数倍性質が悪いわっ！」

「同じ穴のムジナだな…」
姉貴がぽつりと呟いた。
「全くだ」
章太郎も同じ意見を持ったらしい。
奇遇だな、俺もだ。

「先輩方、本気で言ってるんですか？

あたしをこのトイレに落ちた携帯電話ほど使えない教師と同レベルだと！？」

ひとみが流石に切れ始めた。

「まぁ、待て、落ち着けひとみ」

「これが落ち着いていられますかっ！」

「だったら田辺に決めてもらったらどうだ？」

章太郎が作業の手を休めることなく呟く。

何時もの方法だな、

困った時の田辺さん。と俺は命名しているが。

2人とも田辺のことが好きだから田辺の意見に同意せざるを得なくなる。

そして田辺は散々悩んだ挙句に

「ごめんなーはげさわー、おまえよりはこうはかんなぎひとみがいいのだー」

とか言って禿沢がしょんぼりして出て行く。

お決まりのパターンだった。

「いいだろう、今日こそ決着をつけてやるぞ、冠凪ひとみ！」

「一回でもあたしに勝った試しがありましたか？女の敵」

バチバチと火花を飛ばしてひとみと禿沢が睨み合う。

そして2人で一斉に田辺の方を向くと

「さあ！」「どっちです？コウちゃん！」と同時に叫んだ。

「んっと、えっとな、あ、そうなのだ！」

名案でも閃いたかの様に田辺が電球を頭の上に輝かせると

毎度お馴染みの二足歩行型狸ロボの足音を響かせながら泪乃に近づいていく。

「きょうは、るいのにきめさせるのだっ、
こうがえらぶといつもおなじになるのだ、それはさすがにはげさわがかわいそうなのだ」
と既に十分可哀想な発言をしてることも露知らずそう言った。

禿沢は今の田辺の発言にかなり精神的ダメージを負ったようだがそれでも怯まずに
「こ、光ちゃんがそう言うのなら受けてたとうではないかっ！
まぁ、俺様の勝ちは決まった様なものだが」とか何とかブツブツと呟いていた。

やはり若干怯んでいるのかもしれないな。
…大声にして言えてないところを見ると。

「望むところですっ、泪乃ちゃんがこんな人間の屑を選ぶ訳ありませんからっ！」
とひとみもそれを承諾した。

「じゃあ、おこすぞー、おい、るいの、おきろー！」
「むにゃ…わふっ…」
田辺に揺り動かされて泪乃はむにゃむにゃと目を擦る。
そして目の前に田辺の手があることを知ると、当然のようにかぷりと噛んだ。

「ぎゃーーーーーーー！！」
「わふっ？」
「き…貴様、光ちゃんに向かって何たることを…！」

禿沢が叫ぶ。
泪乃は軽く禿沢を見ると心底嫌な物を見る様な目つきになってぷいっと顔を逸らした。

「き、貴様っ！何だ、教師に向かってその態度は、停学にするぞ！」
禿沢はまぁタコのように顔を真っ赤に染めて怒ったね、
でも停学には出来ないな、禿沢ごとき一教師にその権利があるとはとても思えないし、
もし仮に万が一、億が一くらいの確率であったとしても
そもそも泪乃はうちの高校の生徒じゃないからな。

「泪乃ちゃ～ん、おいで～」
「わふっ」

ひとみが誇らしげに「来い」の合図をすると泪乃は嬉しそうにひとみへと近づく。

「きゃー！やっぱりあたしを選んでくれたんですね、
やはりこの宇宙の汚点とあたしは一味も二味も違うのです」
と言って泪乃を抱きしめた。

さっきから禿沢への呼称が段々酷くなっていってるな、別にどうでもいいが。

「く、くそぅ、覚えてろよ！腐ったミカンどもめ！部費のこととか覚悟しておけ！」
そう禿沢が捨て台詞を吐いて部室を出て行った。

「部費の申請は４月にもう申請済みだ、はげピザ」

姉貴がぽつりと呟くと俺たちは再び会報誌作成へと移った。

夏休み突入！ｉｎ合宿

7月も近づいてきた頃、指し当たっての問題は夏休み、である。
そこで今日の緊急議題。
夏休みの間、泪乃をどうするか。である。

ホワイトボードには姉貴の字ででかでかと
「泪乃緊急雇用対策の会」と書かれている。
…どこに就職させる気だ？

「少し、誇張気味に書いただけだ、気にするなバカ」

姉貴はそう言うと議題に戻る。

「まず第一の問題にして最大の問題、この部室が夏休み中は使えないということだ」

俺たちのような弱小部にはよくある話で夏休み中は
この部室が他の部活に乗っ取られてしまいその間活動が行えない。

つまり、その間、安全に泪乃が身を隠せる場所が必要になってくる。
はいはーいとひとみが手をあげる。

「あたしが預かりまーす」
「却下だ」
「はぅん」

姉貴の即答によって異議を申し立てることも出来ぬままひとみの案は却下された。

「こ、こうはやだぞ、るいのといちにちじゅういたらてのひらにあながあいてしまうのだ」

「貴様にも期待はしていないから気にするな、幼女」

「そ、それはそれでなんだかきずつくのだっ…」

田辺はイジケルように床に人差し指で円を描きながら

「もうちょっとねばってくれてもよかったのだ…」

とか何とか呟いている。

実は面倒見たかったのか？

「で、何かいい案は無いか？」

「ふむ…案ね…」

「全日可能でなくて良い方法なら無くも無い」

章太郎が手をあげた。

「言ってみろ」

「毎日、何かしらの理由をつけて外に連れ出せばいい、耳と尻尾さえ隠してしまえば見た目は普通の女子だ」

章太郎の意見に姉貴が腕を組んで考えた。

「…それは私も考えたが、ネタがないんだ、毎日毎日同じ時間外にいるネタが、な」

はいはーいとまたも威勢良く手をあげるひとみ。

「じゃぁじゃぁ、あたしんちの別荘で部の合宿とかはどうですか？部活動という名目も立ちますし日数も稼げます」

おお、そうだ、言い忘れてたが、ひとみは相当いいところのお嬢様らしい、

「ド変態にしては中々マトモな意見じゃないか…少し見直したぞ」

姉貴が珍しく人を褒めた。

「失敬だな、バカ、私は褒めるときはきちんと褒める、今まで褒めるべき対象が見当たらなかっただけだ」

何故それをそんなに誇らしげに言えるのかがわからんな。

「ふむ、では何日頃にド変態の別荘に行くか、そして何日くらい滞在するかを決めよう」

姉貴がホワイトボードに議題内容を書き込んでいく。

「部活合宿スケジュール予定」と書かれ空白の日付が下に書かれた。

「まず貴様らの空いてる日にちを言え、ちなみに私とそこのバカは何時でも大丈夫だ」

「何で俺のスケジュールがもう決められてるんだ？」

「バカの運命は私の手のひらの上だ、それを忘れるな、バカ」

はぁ…そうだよ、姉貴と暮らし始めてからこっち休日という休日を全て姉貴の暇つぶしに使われて、俺は1人で休日を楽しむという崇高な1日を過ごしたことが無い。

「俺も何時でも大丈夫だ」とは章太郎だ。

姉貴は章太郎の名前をホワイトボードに書くと横に円を描いた。
「あたしは8月の末以外なら大丈夫です」
「何だ、ド変態は何か8月末に用事があるのか？」
「部長、本気で言ってますか？8月の末と言えばコミケに決まってるじゃないですかっ」
胸を踏ん反り返らせて威張る意味がわからん。

「っていうかお前、絵では駄目なんじゃなかったのか？」
俺の問いにひとみはわかってないという笑みを零し
「確かにあたしは活字じゃなきゃ萌えません。
ただ極稀に非常に有望な同人小説サークルが参加していることがあるのです、
小説のサークル自体が非常に少ないのでこの機会を逃すと
手に入らないあんな本やこんな本もあるのです」
と言ってまだ見ぬあんな小説やらこんな小説とやらを
その逞しすぎる想像力で想像しているのか瞳をキラキラと輝かせて
明後日の方を向いている。

「幼女はどうだ？」
「こうか？こうはいつでもどんとこいなのだ」

「そうか、ならば全員8月末以外なら何時でも大丈夫ということだな」
姉貴はそういうとサラサラとホワイトボードに日程を書いていく。
合宿予定日・7月30日～8月5日迄。
場所、ド変態の巣。
と書かれたそれを章太郎は生真面目にも一字一句間違えずに
部に一台しか無いノートパソコンに打ち込んだ。

「とりあえずこれで一週間は気兼ねなく潰せるわけだ」
「問題は残る3週間か…」
「とりあえずは日中行動するしかあるまい」
「そうだな、私か章太郎かバカの誰かがついていればとりあえずは安心できる」

姉貴はホワイトボードに合宿以外での泪乃の監視についてと表記して俺たち3人の名前を書き、
面倒の見れる日は必ず連絡をよこすこと、後1人で何日も面倒を見すぎないこと、と書いていった。

「この1人で何日も面倒を見てはいけないってのは何でだ？」
俺は素直に疑問に思ったことを口に出した。

「はぁ？そんなことも分からないのかバカが、
1人で行動できる場所など決まってくるではないか、
そんな同じところに何日も2人で連れ立ってみろ、
すぐに町中の噂になるぞ、いつも同じ場所に出没するバカップル現ると」

「姉貴なら別に問題ないんじゃねえの、それ？」
「私は貴様らと違い多忙なんだ」
「今さっき空いてる日を全員に聞いて自分は何時でも大丈夫って言ってなかったか？」
「何だ、また昔の話か？だからお前はバカなんだと何度言えば…」
「わかった、わかりました」

俺は溜め息をつくと仕方なく姉貴の意見に納得した。
いや、本当はしてないんだぞ。弱いな、俺。

そして7月29日の終業式が終わり、夏休みへと突入した。
学校前に待ち合わせ時間前に到着する俺と姉貴、そして泪乃。
泪乃は意味も分からずサンサンと降ってくる太陽に身を浴びせて大はしゃぎしている。
次いで田辺と章太郎がやってきた。

「残るはド変態だけか、遅いな」
「まだ約束の時間まで5分あんだろ…」

そう俺が呟いたとき目の前を笑えるくらいデカイリムジンが横切った。
はぁ…世の中にはあんなデカイ自動車乗ってる奴も本当に存在するんだな、
と思ったらそのリムジンが止まってゆっくりとバックでこっちに近づいてきた。

スーッとリムジンの窓が開く。
「先輩、先輩、おはようございます」
「ひとみっ！？」
窓から顔を覗かせたのはあろうことかひとみだった。
お嬢様とは聞いていたがまさかここまでとは夢にも思わず
姉貴も章太郎も息を呑んで黒塗りのリムジンを眺めている。
唯一田辺だけが
「うおーっ！でっかいくるまだー、こう、こんなでっかいくるまはじめてみたぞーっ！！」
とか言いながらベタベタとリムジンに手垢をつけてる。
…止めてくれ田辺、もし損害賠償とか請求されたら俺たちの

労働力じゃ例え一流企業に将来就けたとしても人生を６回くらいやり直さないと支払えそうに無い…

「あははは っ、先輩、面白い冗談ですね～、あたしそんな損害賠償とか請求しませんよっ」

それは助かる。とは言えちょっとこれからひとみとの身の振り方を考えなければいかんかもな、

親にでも目をつけられたら猟銃でも持って出てきそうだ。

「先輩のことはご報告済みなのでご心配には及びませんのです」

その報告の詳細を全角文字４００字以内で簡潔に述べてもらいたい。場合によっては今すぐ高飛びの準備をしなければならないからな。

「もう、大丈夫ですってば、さぁ、そんなことよりみなさん乗ってください、

あ、あたしは先輩とコウちゃんに挟まれるのがいいです」

「ふむ、貴様の車だ、それくらいの褒美は取らせてもよかろう」

姉貴がドアの開いたリムジンの中を物珍しそうに眺めながらそう言うと中に入った。

続いて俺が入り、一旦外に出たひとみが入り、田辺が入り、泪乃が続き、最後に章太郎が入る。

「ってかマジ広いな…」

「うむ、とても車内とは思えん…」

「泪乃ちゃんのためにこんなものも用意したんですっ」

そう言うとこれまた恐ろしく高そうな生ハムを取り出すひとみ。

「そ、そんな物を与えるなっ！」
姉貴が慌てて止めに入った。
「え～？なんでです？美味しいんですよ、これ」
「だからだっ、私たちよりも高級な物を与えてどうする、
私は飼い犬の為に水商売で体を売って餌代にするなど死んでも嫌だぞ！」

姉貴は割りと本気で言ってる。
まぁ、あまり飼い犬に贅沢はさせるなって聞いたことあるし、
（前にテレビかなんかでおやつにメロンをやってるって飼い主が居たがあれこそ本物のバカだと俺は思う）
ここは姉貴の意見に同意せざるを得ない。

ひとみはせっかく用意したのに…とぶつくさ文句を言っていたが
「じゃ、あたしたちで食べますか？」
と言って数メートル先にあるテーブルの上に生ハムを乗っける
「これ、切っておいて下さい」
とひとみが言うと小さな声でカーテンの向こうから

「畏まりました、お嬢様」
と聞こえテーブルが自動で動き出して生ハムがカーテンの向こうに送られていった。

というか車の中なのに移動するのに歩くっておかしくないか？
これは俺がおかしいのか？ひとみの家がおかしいのか？

「ところでド変態、別荘とやらには何時頃着くんだ？」
「5時間もあれば着くと思います」

5…5時間…？何県にあるんだよ？
「ふふふ、先輩、それは乙女の秘密なのです」
そう言ってひとみは悪戯っぽく笑った。
俺たちは出された生ハムをこんな美味い物が世の中にあったのかという感想を抱きつつ貧困の差を憂いて雑談やらゲームやらしながら片道5時間、
リムジンに揺られ続けてひとみの別荘へとやってきた。

「到着しました、ここなのです」

そうひとみが言うとリムジンのドアが自動で開いた。
それは別荘というよりももう屋敷であって、
ちょっともう素で若干引いてしまうぐらい馬鹿でかい建物だった。

「何だかゾンビでも出そうな屋敷だな」
姉貴の言葉に俺はああ、そんなホラーゲームあったなとかどうでもいい感想を持ったが黙ってた。
確か「ゾンビハザード」とか言う人気ゲームだ。
第一作目の舞台が不気味な洋館だったか。

「あはははっ、残念ながら出ませんね、ここは日本のお家ですから」
そう言うとひとみは屋敷とは反対方向を指さして

「あっちが海です、プライベートビーチですから泪乃ちゃんでも存分に泳ぐことができます」
プ、プライベートビーチ…そんなもん実在するものだったのか。

「あと、別荘半径1キロメートル以内には対人用の様々なセキュリティを掛けました。
これで人攫い、じゃない、犬攫い対策も万全なのです」

「そ、そうか…よくやったな、ド変態」
あ、姉貴も流石に引き始めてるな…。
「とりあえず今日はもう休むか…何か色んな意味で疲れたぞ…」
章太郎が呟く。
「そうだな」「ふむ」と口々に俺たちは賛同した。
唯一田辺だけが無邪気に
「せんぱいっ！うみだ！しってるぞっ、これえいごでしーだっ！でっかいな！あそびたいなっ！」
とキャッキャッと騒いでいる。

「置いてくぞ、幼女」
姉貴は疲れた声を出して屋敷に向かって歩き出した。
俺たちも後に続く。
田辺は
「こ、こうをおいてくな、ばかー！」
とか言いながら必死に俺たちの後を追ってきた。

屋敷の中も無駄に広い。
何だ、日本にはこんなに無駄に土地が余ってるんじゃないかと
どこぞの大臣にでも軽く文句を言いたくなってくるくらい広かった。

「うわー、でっかいなーここ、ほんとにいえかー！？」
今回ばかりは田辺のその純粋無垢な意見にも賛同できるな。
部屋も１５部屋くらいある。ざっと見ただけでだぞ？

「どの部屋も基本的に同じ作りなので好きな部屋を使ってください、

あ、部長と泪乃ちゃんは同じ部屋がいいですか？」
「ふむ、そう、だな」
姉貴の意見を聞くとひとみが二階の奥の方を指さし、
「あそこらへんがツインルームになっています」と言った。

「分かった、行くぞ泪乃」
姉貴はよほど疲れてるのか泪乃を連れてさっさと部屋へと引き篭もった。

「俺たちもとりあえず別れるか、本格的な合宿は明日からということで」
という俺の意見に対し

「賛成だ」
「えー、きょうはもうあそばないのかっ！？」
「先輩、あたしはあそこの部屋ですから何時でも遊びに来てくださいね」
と三者三様の答えがそれぞれ返ってきて正直黒塗りリムジンが登場した辺りから精神的にかなりやられて来てる俺としては早く寝たいので
「じゃあ」と一言だけ言うと適当な部屋を見繕って入った。

部屋に入るとイキナリガチャッとドアの鍵が閉まって何事かと思ったがホテルなんかで良くあるオートロックというやつで部屋のテーブルの上にカードキーが置いてあった。

もう合宿終わる頃には俺たちの家は恐らく蝉の幼虫が住んでいる穴くらいに
感じるのだろうなとか思いつつ俺は主に心の疲れを癒すために
これまた無駄にデカイベッドに潜り込んだ。

というかこのベッドの大きさならわざわざツインルームにしなくても人型2体くらい楽勝で入れる気がする。

俺はそんな事を思いながら次第に瞼が重くなっていくのを感じていつの間にか寝ていた。

プライベートビーチへ行こう！

翌日、朝。
俺はゆっくりと目を覚ますとここがどこかを認識するところから
始めないといけないようなまだそんな夢の中にいたが、
今日からちゃんとした合宿ということを念頭に置いてとりあえず顔
を洗った。

カードキーを忘れずに取ると部屋を出る。
オートロックの音でまたビビッてしまう自分が多少情けなかったが
まぁ、仕方ない。
俺はみんなが待ってるであろうリビングダイニングへと向かった。

「おう、バカ、起きたか」
「わんっ」
姉貴と泪乃が俺に気付いて挨拶？をする。

「ああ、おはよう」
俺も軽く挨拶を済ませると辺りを見回した。
姉貴はもうこの広い屋敷に順応したらしく好き勝手歩いては
どこから持って来たのか多種多様な新聞に目を通している。

「あ、先輩、おはようございます」
エプロン姿のひとみが出てきた。
…なんだかとても見てはいけないものを見てしまった気がする。
いや、正直可愛いんだが普段のひとみを知ってると
やはり一歩引いて見てしまうのでまぁ、最初の感想はとりあえずこ
れである。

「ひとみ、何でエプロンしてんの？」
我ながら失礼極まりない質問だ。
だが敢えてここはすべきだろ。

「何でって、みんなの朝ご飯なのです。あたしも花の乙女なのだから料理くらいできるのです」
そう言ってひとみはフライパンとフライ返しを手に持ってカンカンと打ち鳴らした。

「ひとみの家ってすげぇ金持ちなんだから料理とか全部自動で出てきそうなもんだけどな、
ほら、執事とかメイドとか」

俺がそう言うとひとみは
「先輩、甘いのです、確かにあたしの家はお金を持っているかもしれませんが
持っているのはあくまであたしの親であってあたしではないのです。
あたしは女なので跡を継げないのです。
だから今のうちから何時先輩の家に花嫁に行ってもいいように
絶えず花嫁修業の日々に勤しんでいるのです」
と言った。

「はぁ、何だか知らんが金持ちも金持ちなりに大変ってわけなの…か？」

俺の答えにひとみは満足そうに微笑むと「なのです」と頷いた。

章太郎も続いて起きてきた。
「何だかあまりぐっすり寝れた気がしないな、でか過ぎるベッドというのも考え物だ」

とやっと俺の味方らしい意見が現れて俺は心底安堵した。

そうだな。
どのくらいの安堵感かと言うと、ガキの頃にあった引っ込む刃物らしき玩具を
本物と勘違いしたまま刺された後にそれが偽者だと気付いたくらい…
っていうか俺は例え話が下手だな。

とそこで、辺りを見回す。

「あれ…？田辺は？」
俺は1人足りないことに気付くと誰とも無しに聞いた。

「幼女ならまだおネンネの時間だ、何せ幼女だからな、
日に15時間は睡眠を取らなくてはならないのだろう」

姉貴は新聞から目を離さずに俺の問いに答える。

「マジか…あいつまだ寝てんのか」
「何というか、ある意味逞しいな」
俺と章太郎が同時に呟いた。

「何がだ？貴様らは昨日眠れなかったのか？」
と問い返してきた姉貴に俺と章太郎は多分、相変わらず高い順応力
をお持ちですね、シモーナ様は。
という同じ感想を持ったに違いない。

30分後、ようやく眠たそうに目を擦りながらよちよちと田辺がおぼつかない足取りで歩いてきた。

「じゃあ、みなさん揃いましたので朝ご飯にするのです」と言ってひとみが料理を運んできた。
花嫁修業が云々の件は伊達では無かったらしくかなり美味かった。
惜しいね、これで人格さえ普通ならいい恋人も出来るだろうに。
「あたしには先輩とコウちゃんがいるので他に恋人はいらないのです」
と俺たちの食べた皿を片付けながらひとみは言った。
朝飯を食べて、茶を飲みつつマッタリしていると
姉貴が6部目の新聞を読み終えて全ての新聞を元あった場所に戻してきた。

っていうかどこにあったんだ、その新聞の束は。

「書庫だ」
簡潔に俺の問いに姉貴は答えた。
書庫、ね。
もう何が出てきても驚かないぞ。
慣れたものだ。

「部長、あたしの書庫に足を踏み入れたのですかっ？」
ひとみが聞くと
「ああ、ド変態らしい、実に変態一色に染まった書庫だったな、マトモな読み物はあの6部の新聞だけだ」
と姉貴が言いそれに対して
「部長はわかってないです。あの新聞には全てバイセクシャル関係の記事が載っているのです」
と相も変わらず訳の分からない誇りでひとみは胸を張った。
「そんな下らないことでド変態と脳を共有しようなどと思わん」

「がーん」
きっぱりと姉貴が伝えるとよよよとひとみがオーバーに崩れ落ちる。
「なーなー、ぶちょう、こうはうみにいきたいぞ、うみにいくのだ！」
「海？海に行って幼女が何をする？」
「およぐにきまってるのだっ！」
その田辺の言葉に姉貴は盛大に笑うと
「はっはっは、面白い冗談だ、貴様の様な幼女が泳げるわけがあるまい」と
トンでもなく酷いことをサラりと言った。
「お、およげるのだっ！これでもこうはしょうがくせいのとき、すいみんぐすくーるでいちばんだったんだぞっ！」
「ほぅ」
それを聞いた姉貴の目がキラリと光ると
「そこまで言うのなら幼女の泳ぎがどれほどの物か見物せねばなるまい、水着は持っているか？幼女」
と聞く。
「ぐもんなのだ、こうはいつでもどこでもまいみずぎをじさんしてるくらいすいえいずきなのだ」
「だったら水泳部に入れば良かったろうに…」
と呟いた俺の声を聞いた田辺は何かトラウマでもあるのか
「はいろうとおもったけどせがひくすぎてだめとかいうわけのわからないりゆうでにゅうぶできなかったのだ」
と言った。

「ああ…まぁ、高校のプールに足、届きそうも無いもんな、田辺…」
と俺は同情の念を込めて呟く。

ひとみはまた向こうでプールの底に足が着かなくて
もがき苦しんでいる田辺を想像してるのか必死に笑いを堪えていた。

「ぷぷっ…プールに届かないコウちゃん、萌える…ぷぷっ」
とか呟いてる。

「で、どうすんだ？海行くのか？」
「ああ、ド変態、私は生憎こんな辺境の地に追いやられるとは
思っていなかったから水着を持参していない、私に合う水着はある
か？」

姉貴の問いにひとみは
「大丈夫です、そもそもここに来ようと言ったのはあたしですので、
その辺の抜かりはないのです」
と胸を叩いた。

「もちろん、男性用水着もあるのです」と付け加えた。

それは全うな水着なんだろうな？

「大丈夫なのです、先輩のブーメラン水着は確かに魅力的ですが、
副部長のは見たく無いですから普通のを用意させていただきました」
と言って奥にある一面のクローゼットを開ける。

そこには大量の水着が用意されていた。
確かに普通のもあるが中にはなんじゃこりゃという珍品まで揃って

る。

「念には念をいれました、もしかしたら先輩たちが望むといけないと思ったのでそのための配慮です」

「わんっ！わんっ！」

泪乃がクローゼットの奥まで顔を突っ込んではしゃいだ。

「おー、るいの、たんけんかっ？こうもまけないぞー！」

そう言うと田辺も女物の水着の山に突貫した。

俺たちは一旦水着をそれぞれの部屋に持ち帰って着替えを済ますと今度は屋敷の玄関前に集合した。

「プライベートビーチはここから歩いて2分ほどです、何時でも疲れたら戻ってこれるのです」

そう言うとピンク色のビキニを着たひとみが出発です、と言って先導切って歩き出した。

これまた何故かスクール水着の田辺がきゃっきゃっと後に続く。

姉貴は割りとボーイッシュな感じの白と黒のストライプの水着。

続いて泪乃が青いワンピース（尻尾穴有り）を身に纏って姉貴にじゃれついた。

その後を俺と章太郎が

「これって文芸部の合宿なんだよな？」

という素朴な疑問を投げかけつつ後に続く。

まぁ、多分姉貴的には今日の文芸部の活動は今朝の新聞６部読破で
終了しているんだろうし、
玉にはこういう滅多に来れない所で遊ぶのも悪くないという気持ちも
織り交ざってか俺も章太郎もそれ以上深くは追求せずにいた。

海を満喫（前書き）

そういや今年海行ってない…（、・д・、）

海を満喫

そしてプライベートビーチだ。
しかしこんだけ広い海が貸切ってのは凄いな？
今正に夏休みに入って2日目、
どこの海も黒山の人だかりであろうことを想像すると
俺はそっとこのプライベートビーチを
提供してくれたひとみに感謝をしつつ適当な所に腰を下ろした。
田辺と泪乃は海を見て猛烈に興奮してるのか一目散に海の中へと飛び込んでいく。

「幼女、泪乃、ちゃんと準備運動をしろ」

姉貴も注意はしているがどことなく楽しそうだ。
ひとみはてきぱきとどこから用意したのかパラソルを立てると俺と章太郎に
「日差しが強いですからどうぞ」
と勧めて来た。

「あー、ひとみは泳がないのか？」
「あたしは肌が弱いのです、だからサンオイルを塗らないとダメなのです」
そう言ってひとみは俺に瓶を渡す。

「…何だ？」
「何って、決まってるじゃないですか、塗ってください、先輩」

そのひとみの言葉にむんずっという音と共にひとみの肩を掴んだのは姉貴だ。

「まぁ、まてド変態、そんなバカにサンオイルなど塗らせては下手をすれば妊娠してしまう、ここは私が塗ってやろう」

心なしか笑顔が怖いぞ、姉貴。

「えー、でもあたしは先輩に塗ってもらいたいのです」

「うぐっ、だ、だがな…」

「それとも何ですか？あたしが先輩にオイル塗ってもらうと部長に何か不都合なことでもあるのですか？」

にひひと目を細めながらひとみが囁いた。

「バ…バカな、何故ド変態にバカがオイルを塗ることで私に不都合が出る？」

「なら、あたしの願望の邪魔はしないで欲しいのです、この夏は一度きりなのです、あたしは先輩と青春を過ごすためなら部長を敵に回すことも辞さない所存なのです」

ひとみはサンオイルを持った手の人差し指だけを上にあげるとそう言った。

しかし口で姉貴と対等に勝負するとは…伊達に文系トップなだけはあるな。

「…ちっ、仕方あるまい、だが変態行為は許さんぞ」

「分かっているのです、あたしは確かに超変態ですが
流石に親しい人たちの目の前で野外プレイはしないのです」
そう言うと満面の笑みで俺の方に振り向き、じゃあお願いしますと
サンオイルを渡してきた。
「まぁ、オイル塗るくらいいいけど…変な声は出すなよ？」
「分かっているのです、先輩に塗ってもらうためです、涙を呑んで
ここは自重するのです」
俺はそのひとみの台詞を聞くとサンオイルを受け取る。
ひとみは砂浜にうつ伏せに寝そべると「どうぞ」と言った。
「役得だな、翔太」
ちっとも羨ましく無さそうに章太郎が呟く。
「何なら変わってやろうか？」
「遠慮しておく、冠凪に恨まれたくないしな」
章太郎の言葉に俺は肩を竦めるとサンオイルのキャップを外して手
のひらにオイルを取り出す。
ぺちょっとひとみの背中にオイルをつけた。
「ちべたっ」ひとみが思わず声をあげた。
「我慢しろ」俺は丹念にひとみの背中にオイルを塗っていく。
「はぁ…今あたしは正に幸せというものを実感しているのです」
「それは何よりだな」
俺は特に感情を持たせず言うとオイルを今度は足の方に延ばした。
「わふっ？」

不思議そう顔で泪乃が俺とひとみをしゃがみこんで覗き込んだ。
「何だ、泪乃、お前も塗っておくか？」
「わんっ」
泪乃が嬉しそうに吼えた。

「じゃあ、これ終わったら塗ってやるからそこで伏せてろ」
「わふっ」
俺がそう言うと泪乃はひとみの横にうつ伏せに伏せる。

「ふふふ、先輩と泪乃ちゃんに囲まれて、ここはエデンです」
ひとみは上機嫌にそう言った。

ひとみにオイルを塗り終えると次に泪乃にオイルを塗っていく。
泪乃は若干擽ったそうに「きゃふっ」と吼えてじゃれるようにあお向けに反転した。

「こら、泪乃、あまり動くな」
そう言って俺は泪乃をうつ伏せにしなおす。
「くぅ～ん」
泪乃は尻尾を振りながら目の前の砂を掘って遊び始めた。

俺は2人（1人と1匹？）にサンオイルを塗り終わると
ひとみが用意したビーチチェアーに寝そべってぼーっと海を眺めていた。

正直な所、あまり泳ぎは得意ではないんだ。
海の中では田辺と泪乃がきゃっきゃうふふ言いながら水をかけ合っている。

「るいのー！くらうのだーっ！！」
と言って少量の水をこれまた小さな手で掬い上げて田辺が泪乃にかける。
泪乃はちょっぴり腹にかかった海水を少しだけ舐めると
凄くしょっぱそうな顔して後ろを振り向いて思いっきり尻尾を海面に叩きつける。
その衝撃で大量の海水が田辺の頭からどっぷりとかかった。
勢い余ってそのまま転倒する田辺。
「し、しっぽをつかうなんてひきょーだぞっ！るいのっ！しっぽはきんしなのだ！」
「わふっ！」
田辺の言葉を恐らくは理解した上で再び思いっきり尻尾を海面に叩きつける泪乃。
「うあーーーーー！しょっぱーい！！おもいっきりのんだのだー！！」
田辺がぺっぺっと海水を口から出しながら叫ぶ。
「も、もういいのだ！こうはひとりでおよぐのだ！」
すっかりご機嫌斜めになった田辺はそう言うと
その小さな体に似合わない卓越した泳ぎですいすい沖へと向かっていった。
「ほう、幼女のやつ、言うだけはあるじゃないか」
俺の隣で姉貴がおでこに手を当てながらそう呟いた。
確かに、小学校の頃スイミングスクール一位とかいうのは嘘ではな

いらしく、
凄まじいスピードのクロールで沖へと遠ざかっていく。
「おい幼女！あんまり遠くまで行くなよ！」
姉貴がどこからか取り出したメガホンで沖に向かって叫んだ。
田辺は手だけでそれに応えて折り返して浜辺の方に泳いでくる。
泪乃はそれを見てまぁ、俗に言う犬掻きで田辺の後を追っていた。
しかし泳ぎまで犬だな、泪乃。
しかも恐ろしく速い。

「わふっわふっ！」
海面からちょこんと顔だけを出して脅威的なスピードで田辺を追う。
口はあんぐりと開いていてまるで今から貴方を噛みますよーと言わんばかりだ。
田辺もそれに気付いたらしく半分泣きべそを掻きながら
懸命にクロールで泪乃の猛攻から逃げてくる。

捕まると思われたその瞬間、田辺は泳ぎをクロールから潜水に変えた。
考えたな、田辺。確かに犬掻きの泪乃では潜水の田辺は噛めない。
だけど、それ何時まで息が続くかの問題だと思うぞ。
と、思ったら田辺は小さな体に似合わない肺活量でそのまま浜辺へと上がってきた。

「ぷあーっ、はぁはぁ…る、るいのからにげるのもひとくろうなのだ…」
泪乃はまだきょろきょろと田辺の姿を探してる。
「お疲れ、田辺、スポーツドリンク飲むか？」
「あ、のむのだー」

そう言うと田辺は５００ｍｌペットボトルを両手で
受け取ると実に美味しそうにそれを喉を鳴らして飲んだ。

「どれ、私も一泳ぎしてくるか…バカも行くか？」
姉貴が準備運動しながらそう言った。
「いや、俺はいいよ」
俺がそう断ると姉貴は厭らしい笑みを浮かべて
「そうか、バカは浮けないんだったな、いや済まないな、その事を
すっかり忘れていた」
と言った。

ったく人を小ばかにするのは超一流だな、姉貴。

「なんなら教えてやろうか？」
「はっ？」
俺が姉貴の言葉に素っ頓狂な言葉を上げると姉貴は

「いや、高校生にもなって泳げないなど恥以外の何者でもあるまい、
そしてそれはそんな弟を持つ私もだ、ここでこの場所に来たのも一
つのキッカケだろう、
泳げるようになるまで私がバカに物を教えるのも手という事だ」

「いや、別に俺、恥ずかしくねえから…」

「黙れ、さっさと来い、バカ」

姉貴は問答無用に俺の右手を掴むとずんずんと海へと近づいていく。
ちらりとさり気無く章太郎に助けを求めたが章太郎は
両手で合掌の形を取っていて取り留めて俺を助ける気など
更々無いらしく俺は観念して姉貴のペースに合わせて海の中へと入

っていった。

「いいか、バカ、基本人間は浮くように作られているのだぞ」
「んなこと言ったって浮かないものは浮かないんだよ…」

姉貴の講釈に頭を掻いて言い訳をする。

「大体、浮こうと言う気持ちが足りないんじゃないのか？」
そこで精神論かよっ！
「幼少から何度かプールに行った事はあるが貴様が浮いてるところはおろか水に顔をつけてる所も見たことがないぞ、思い込んでいるだけではないのか？
自分は泳げない、と」

姉貴の言う事に俺は自分の小さかった時の事を思い出す。
そういや姉貴と初めて行ったプールで飛び込み台に無理やり立たされて
思いっきり突き飛ばされて溺れてからプールには行っても水には入ってないな…
というか俺の泳げない原因は姉貴じゃないのか？

「あぁ…そんなこともあったな、だがそれは言い訳にすぎん、
つまりは今も水に顔すらつけられないのはバカの甘ったれた根性が為しているんだ」

そう言いながら姉貴は海面を指差す。
「今から私が水の中で右手でぐーかちょきかぱーを出す、
バカは目を瞑らずに水に入りそれが何だったのかを当てろ」
「はぁ…」

俺は経験上、こうなった姉貴は止められないことを知っている。
そして逆らったらどうなるかも、だ。
生返事を出してとりあえず水に慣れるために少量の海水を掬って顔にぴちゃぴちゃと当ててみた。

あれ…意外に行けるかもしれないぞ…思ってたよりも恐怖を感じない。
こりゃ姉貴の言う事も本当に一理あるのかもな。

「行くぞ」そう言うと姉貴は勢い良く海へと潜った。
俺は意を決して潜る。
潜ったはいいが目が開けられない。
水の中に潜っただけでも奇跡に近いのにやっぱりこれから
更に目を開けるのは無理かと思ったその時、俺の額に衝撃が奔った。

何事かと思わず目を開けてしまう俺。
そこには海中に漂った姉貴が二本指を突き出して俺の額に当てた姿があった。
俺が目を開けたことを確認すると姉貴は満足そうな笑みを浮かべて海面へと上昇する。
それを見て俺も海上に顔を出した。

「ぶはぁ！」
「どうだ、バカ、見えたか？」

両手で膝に手をついている俺に姉貴が聞いてきた。

「見えたよ、ちょきだろ？ったく人のデコ小突きやがって…」
「バカが目を瞑っているから協力してやったんだ、
それよりもどうだ？自分で思ってたよりもずっと恐怖など無かった

だろう」
「確かに…な」
俺の答えを聞くと姉貴は心底嬉しそうな微笑みを浮かべて俺の手を取った。
うわっ、こうして見ると凄い美人のイタリア人だな。

「そうだろう、やはり私の考えは間違っていなかったわけだ。
古来よりバカにつける薬は無いとかバカは死ななきゃ治らんとか言うが私はそうは思わん、
それは教え方が悪いのだ、教え方一つでバカはキチンと前進する」
姉貴は一人うんうんと頷くと
「まぁ、いきなり泳げと言うのは無理があるからな、
今日は水の中で目を開けられただけで十分だ」
と言って俺の手をそのまま引いて海から上がった。

俺たちは夏の海を一通り満喫するとひとみの別荘へと戻った。
疲れていたので夕食もそこそこに全員就寝を取る。

バーベキュー！（前書き）

バーベキューはしました（、・ω・´）

バーベキュー！

合宿3日目。
今日もいい天気だ。
朝起きていくと姉貴が何か書いていた。
何書いてるんだ？

「これか？これは今回の合宿のレポートだ。
一応はげピザに提出せねばならんからな、部長の義務というやつだ」

「合宿ったって特別文芸部らしいことなんてやってないじゃねぇか…」
俺がそう呟くと姉貴はちちちと人差し指を振って
「情報の捏造など幾らでも出来るがあえて真実を書いてやるつもりだ。
幼女の水着姿を見れなかったと知ったはげピザの顔が見物だな」
と言ってくくっと笑った。

「先輩、先輩」
台所からひとみが昨日と同じエプロン姿で出てくる。

「どうした？」
「今日もいい天気ですし、
折角なので庭にあるバーベキューコーナーでみんなでバーベキューをしようかと思うのです」

ひとみはそう言うとアホみたいにでかい冷蔵庫から
恐ろしく高そうな肉を取り出すと左手でブイサインをした。

「ほう、バーベキューか、暫く食べてないな…」
章太郎がひとみの持った肉を見てそう呟く。
アホ、普段そんなに食べる機会ないだろ、バーベキューなんて。
何かイベントが無い限り家は食さないぞ。

「にく！にくかーっ！いいなー！こうもたべたいぞっ！」
「野菜も食べないと大きくなれんぞ、幼女」

姉貴が田辺の頭を撫でながらそう呟く。
「ふぁ…た、たべるもん、こうはすききらいなんてしないぞ！ぴーまんもがまんしてたべる！」
「ではコウちゃんのためにピーマンをどっさり用意しておくのです」
「ああ、それがいいな、良かったな幼女」
とひかりと姉貴が次々に田辺を口撃した。

「う、うわーん！あやまるのだ！だからこうはにくがたべたいのだっ！」
「うふふ、冗談ですよ、コウちゃん」

そう言いながらひとみが田辺の頭を撫でた。
「ふぁ…じょ、じょうだん？」
「はい、ピーマンの中にお肉を詰めて出してあげます、
好き嫌いも克服できて一石二鳥なのです」

ひとみがこれはいいアイディアと言わんばかりに左手の人差し指を上にあげた。

「か、かわってないのだーっ！！」
田辺が涙目になりながら姉貴を見上げた。
禿沢辺りならイチコロで逝ってしまいそうなその顔も姉貴には全く

効果が無く
「好き嫌いをしているから貴様は何時までたっても幼女のままなんだ、試しに食べてみろ」
と言い放った。

「だ、だけど…」
「問題ないだろう、見ろ、この肉を、多分…
というかこの先これを逃すと一生食することは出来ない代物だぞ」

姉貴の言葉にちらりと田辺はひとみの持つ肉を見た。
細かく入った霜降り、
買ったらきっとグラムで軽く諭吉が何人か飛んでいくんであろう
その肉を凝視すると田辺の口から涎がだらだらと滴り落ちた。

「う、うん、た、たべてみる…こうはこうかいはしたくないからな…」
と目線を肉から外さないまま田辺はそう呟いた。

「ああ、そうだド変態、泪乃用に安い肉も用意しておけ、贅沢を覚えられては敵わん」
姉貴がちらりと泪乃を見てそう言った。

「わかりました、では近くのスーパーからセール品も取り寄せるのです」
そう言うとひとみは携帯を取り出してどこかに電話する。

「あ、あたしなのです。近くのスーパーから一番安いお肉を買ってきて欲しいのです、
え？何故安い肉を？ふふ、あたしが食べるんじゃないのでご心配には及びませんのです、

飼い犬用です、何でも贅沢させては駄目らしいのです、はい、それではお願いします」
と伝言を恐らくはあの黒いリムジンに乗っていたであろう使用人に伝えると携帯を切ってポケットに仕舞った。

それから二時間後、パッケージに思いっきり「タイムセール！！」と書かれた元が２００円でタイムセールで更に値引きされ半額１００円な俺たち一般人に最も慣れ親しんでるであろう肉が大量に届いた。

「では少し遅くなりましたが、朝ご飯兼お昼ご飯という事でバーベキューを始めましょうか」
そう言うとひとみは外に出てバーベキューセットの前に立つ。
鮮やかな手並みで火を起こすと網を乗せてその上に肉と野菜を置き始めた。

「こっちのお肉は実は生でも食べられるのです。
あたしはレアはあまり好きじゃないのでお勧めはしませんが」

そう言って肉を引っくり返す。
マジか…生で食える肉ってユッケ以外に実在するのか。

章太郎はひとみの言葉に早速生の肉を一切れ取って咀嚼した。
瞬間、章太郎の顔に衝撃が奔る。
まるで一昔前の料理漫画の王様のように口から光を出しそうな勢いで「う、美味過ぎる！」とか叫んでる。

そんなにか、そんなになのか？

「これはもう食べ物であって食べ物で無いな、
これを食べ物と呼んでしまっては今まで俺たちが食べてきた物は
生ゴミのような価値しか無くなってしまう」

そう言いながら章太郎は再び生の肉を一切れ掴んだ。

「余り生の肉をおいそれと口へ放るな、章太郎、細菌でも入っていたらどうするつもりだ」
そう言いながら姉貴は安い方の肉を両面良く焼くと皿へと移して泪乃へと渡す。

泪乃は慣れたもので器用に箸で肉を掴むと心底幸せそうな笑顔で肉を頬張った。

「ううー、ぴーまんかー、これがぴーまんなのかー」
田辺はピーマンの肉詰めと睨めっこしながらそうブツブツと
呟きながら口元まで運んでいっては元の位置に戻し、また口元まで
運ぶ、を何度も繰り返している。
何度目か口元へ運んだ時、田辺の後ろからひとみが急に両手でパンッ！と手を叩いた。

「ひゃぁっ！？」

吃驚した勢いでそのまま田辺の口の中へと消えていくピーマンの肉詰め。

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ…
最初は驚いていた田辺だが咀嚼を繰り返すうちにその顔は段々と恍惚な物へと変貌していった。

「う、うまー、ぴーまん！ってかにく！うまーっ！！」
「ふふふ、ですです、コウちゃんは今、大人への階段を一歩昇ったのです」

「うまいなー、こうはぴーまんがこんなうまいものだとはしらなかったぞー！！」

余程気に入ったのか田辺は口の中へと次々にピーマンの肉詰めを放り込む。
俺もそんなに美味いのかと一口食べてみた。
いや…田辺、多分これはピーマンが美味いのでは無く、
明らかに肉の甘味が強すぎてピーマンの味が全く感じないだけだぞ…

しかし、これ、本当に肉なのか？
舌の上で融ける肉はテレビの中の空想の産物だと思っていたがやはり実在したのか…
冠凪家、恐るべし…

合宿４日目、５日目も俺たちは楽しく過ごした。
もうここが自宅でいいんじゃないかと思ってしまえるくらいに
そこは楽園であり、こんな後輩を持てた俺たちは心底そこに感謝するべきだとつくづく思ったね。

禿沢来襲、合宿終了

そして6日目、生憎この日は天気に恵まれず、外は大雨、
天気予報じゃ夜中には晴れるらしいから各自リビングでまったりと寛いでいた。

昼飯のひとみ特製チャーハンをみんなで食ってると突然、
サイレンのような音が別荘中を鳴り響いた。

『対人物センサーに反応、繰り返します、対人物センサーに反応』
無機質なテープレコーダーのようなアナウンスの声が別荘中に駆け巡る。

「センサーに反応…？」
「誰かが家の敷地内に入り込んだようなのです」

ひとみがそう言いながら指をパチンと鳴らす。
するとどこに隠れていたのか黒服の大男たちがぞろぞろと四方八方から現れた。

「な…なんだぁ！？」
「家のセキュリティーに無断で侵入するとはいい度胸なのです、狙いは泪乃ちゃんですかね？」
「ふむ、泪乃を狙ってやってくるような輩が存在するとはとても思えないが、
もし本当にそうだとすれば放置も出来まい」

あの、姉貴？

貴方はこの黒服の大男たちを見て微塵も動揺しないのですか？
「ド変態がブルジョワなのはもう周知の事実だ、
これくらいの事はやるだろうことは予測できる」
ああ、そうですか、やはり順応力が高いよ、姉貴は。
「では、この大雨に紛れてやってきたコソ泥さんを確保しにいくのです」
ひとみはそう言うと別荘の玄関を盛大に開ける。
俺と章太郎はお互いを見てやれやれ、と言った感じで両手を上に上げた。
仕方ないだろう？
何時だって女子の方が男子よりも強い世の中なのさ。

「るいのがねらわれてるのかー…？」
田辺は震えながら俺の裾を掴む。
「いや、まだそうと決まった訳じゃないから、怖いならここで待ってるか？」
俺が田辺の頭を撫でながらそう言うと
「ふぁ…い、いくのだ、こうだってるいののひとりやふたり、まもってみせるのだ！」
と歯をガチガチと震わせながらそう言った。

別荘を出て、１０分ほど歩くと林が見えてきた。
ひとみは携帯を取り出すと何かを確認して、
「この辺りのはずです、相当の使い手じゃない限り、
我が家の防犯システムによって駆逐されているはずなのです」
と言って恐らくは携帯に映し出されているであろうそのポイントに

向かって歩き出した。

「おい、いたぞ」

章太郎の声に全員が集まる。

その人物は黒焦げになってうつ伏せに倒れていて、

生憎性別以外に特徴なのは禿げた頭とちょっと太めな体つき…

ん？この風貌…どこかで…？

姉貴が無言でその男を仰向けに引っくり返す。

「…！」

全員の空気が止まった。

目をぐるぐると回転させてまるで漫画のように気絶しているその男の正体は…禿沢だった。

「どうしてこの男がここにいるのです？」

心底嫌そうな顔で思わずげっと唸るひとみ。

「執着心だけはこの世のどいつよりも強い男だからな、

恐らくは幼女の匂いでも嗅いで追跡してきたんじゃないのか？」

「そんな犬じゃあるまいし…」

「例え話だ、本気にするな、しかしこいつが犬だったなら絶対に拾わんだろうな」

その姉貴の言葉に全員が一斉に頷いた。

とりあえずこの大雨の中放置する訳にもいかないので

（姉貴とひとみは本当に放置しそうな勢いだったが）別荘の方に運

ぶことになった。
白いタンカが黒服の大男たちによって運ばれてきて気絶した禿沢を乗せ、別荘へと連れて行く。
「なんか拍子抜けしたな、折角この大雨の中はるばるやって来たというのに、オチがあのはげピザでは笑いにもならん」
「全くなのです、どうせなら泪乃ちゃんを狙ったアメリカの裏組織とか旧ソ連のカーゲーペーとか期待していたのに…」
お前らは本当に禿沢が嫌いなんだな、まぁ、俺も好きではないが。別荘に戻って3時間ほどすると禿沢の意識がようやく戻り、ひとみを見るや否や恐ろしい勢いでべらべらと文句を言い出した。
「さ、先ほどの爆発はなんだ！？冠凪ひとみ！貴様の仕業か！？日本の土地に地雷を埋めるんじゃない！！どれだけ常識知らずなのだ、これだから貴様ら腐ったミカンどもは…」
「おい、はげピザ」
「何だ、滝内シモーナ！？言っておくが貴様も同罪だぞ！これは立派な傷害罪だからな、覚悟しておけ！」
「黙れ、素直に私の問いに答えろ、貴様、何故ここにいる？」
姉貴の言葉にうっと言って禿沢は黙ってしまった。

「……」

後ろめたそうな顔で俯く禿沢。

「答えろ、はげピザ」

「…光ちゃんの家に連絡を取ったら合宿だと言われたんだ、どういうことだ、これは！俺は聞いていないぞ、合宿の話など！」

あ、開き直った。

そして逆ギレというやつだ。

「合宿という単語だけでこの位置まで特定出来たのか？」

「ふっ…俺の情報網を甘く見るなよ、滝沢シモーナ。俺の脳内には光ちゃんセンサーというものが付いていて、何時、どんな時でもどの場所に光ちゃんが居るか分かるようになっているんだ、参ったか、ぶわっはっはっは！！」

うわぁ…こいつ何言ってんの、マジで言ってんのか、それ。

真性のストーカーじゃねぇか。

「どうやらシモーナの言ってた嗅覚が本当に存在するらしいな、黒沢には」

章太郎がどうでも良さそうな顔をしてポツリと呟いた。

ああ、何か禿沢の本名、久々に聞いたな。

「ところでこのむやみに広い家は誰の所有物だ？

まさか空き家を無断で使っている訳ではあるまいな」

禿沢はそう言うと姉貴を睨んだ。
「失敬だな、貴様は、この別荘の所有主なら貴様の目の前にいるド変態だ」

「……なっ！？」
禿沢は姉貴の言葉に驚愕の表情を浮かべてひとみと姉貴を交互に見る。
口はパクパクと何を言ってるいるのかわからないような声にならない声を上げている。

「ま…まさか、今年入ったどこぞの良家のお嬢様って…」
「それはきっとというか、多分、恐らく、間違いなく、１００％あたしのことなのです」
ひとみの言葉に禿沢は顔面が蒼白になる。

まぁ、それはそうだろうな。
あれだけやり合ってきた相手が実は自分とは住む世界の違う超お嬢様と分かれば誰でも多分こんな反応になるぞ。

ひとみの家を敵に回したら恐らくは禿沢の命は無いだろうな、残念だったな、禿沢、だが骨は拾わんぞ。

「か…冠凪…様…？」
「何ですか、イキナリ遜って…器が知れますよ、宇宙の屑」

ひとみは物凄い冷たい目で禿沢を睨む。
蛇に睨まれた蛙のように禿沢は硬直して直立不動の体制になっているのはきっと影にちらちらと見え隠れする黒服大男の存在に気付いたからに違いない。

「は、はい…俺…いや、わたくし、宇宙の屑でございます、
ははは…だから、あの、申し訳ないんですが…
この合宿…わたくしも置かせていただけませんかねぇ？」

「だが断るのです」

光の速さで即答するひとみに対して土下座で答える禿沢。

おー、嫌だね、俺は大人になってもああいう大人にだけはなりたくないな。

「奇遇だな、翔太、俺もそう思ったところだ」
話が分かるな、章太郎。

「まーまー、いいじゃないか、かんなぎひとみ、
どうせあといちにちくらいなんだから、とめてやっても」

田辺が純真無垢と言うか何も考えてないというか
小学生の女の子そのままな笑顔を向けてひとみにそう言うとひとみは
「コウちゃんがそう言うなら…」
と何やらブツブツと文句を言いながら禿沢の参加に渋々承諾した。

夜、盛大に降っていた大雨は嘘のように晴れ渡り、
気持ちの良いくらいの星空が空を瞬いている。

「合宿最後の夜、そして今は夏、といえば花火なのです！」

ぐっと拳を胸の前で握り締め力説するひとみ。

「まぁ、意見は悪くないが、そんな急に振られても用意がないぞ？」

「あたしの方で用意はしてあるのです」
流石としか言いようがなくなってきたな、どんだけこの合宿楽しみにしてたんだ、こいつは…？
「うむ、では中庭に出ようか、幼女、火の取り扱いには気をつけろよ」
「おー！はなびだーっ！こうははなびがすきだぞー！！」
「そうかそうか、光ちゃんは花火が大好きなのか」
ニヤニヤとニヤつきながら禿沢がさり気無く田辺に近づく。
両脇から黒服ガードマンにガッシリ抱えられて
「な、何をするかっ！貴様ら！！」
とか言いながら足をジタバタとさせ、田辺から遠ざけられて行く禿沢。
「さぁ、宇宙の屑も去ったことだし、始めるのです」
満面の笑みでひとみがそう言った。両手に抱えきれない程の花火を持って。
あぁ、大半の男なら瞬殺できそうな笑顔だな。
あくまで内面を知らなければ、の話だが。
「半分持つよ」
俺はそう言うとひとみから花火を半分受け取った。
「あぁ…先輩、これってもしかして…愛、ですか？」
「ちげぇ」
「う、そんなきっぱりくっきり断言しなくても」
そう言いつつもひとみはどこか嬉しそうだ。
しっかしこんな量の花火、一晩で消化できるのかね？

俺たちは中庭に出ると手持ち式の花火からとりあえず始めることにした。

「おひょー！にほんどうじなのだー！！」

田辺がキャッキャ言いながら丸い円筒型の花火を片手に
一本ずつ持つと同時にひとみに点火してもらい大はしゃぎで前に両手を突き出す。

「こら、幼女、花火は一本ずつやれ！
貴様のようなお子様が二本同時にするなど危なすぎて見てるこっちがハラハラする！！」
「まぁ、いいじゃないかシモーナ、冠凪の言うとおり今日で合宿も最後だ、
楽しくないよりは楽しい方がいい、見ろ、あれを」

章太郎が指差す方を見ると、死んだ魚のような目で
体育座りをして一人ポツンと線香花火をしている禿沢の姿があった。

「……あれが敗者の姿だ」
流石に同情したかのように章太郎が呟く。
「成る程、だが奴に同情の価値はド変態のプライベートビーチに
落ちている砂粒一欠けらの価値も無いな、何せはげピザだからな」

相変わらずとことん嫌われているな、禿沢。
まぁ、俺はその寂しい夏の思い出にちょっとは同情してやるくらいの器量はあるぞ。
あくまでちょっとだけどな。

「はげさわー、たのしんでるかー！くらいぞー、なははははは
ー」
禿沢の沈んだ気持ちなどどこ吹く風なのか、
田辺はクルクルと回転しながら花火を振り回しながら禿沢に声をか
けた。
「た、楽しんでいるとも！光ちゃんこそ楽しんでいるかい？」
田辺に声をかけられたのが余程嬉しかったのか禿沢はちょっと涙ぐ
みながらそう答えた、
瞬間に禿沢の持っていた線香花火がぽとりと落ちる。

「…あ」

それを見てまたブルーな気持ちが蘇ったのか背景を真っ暗に染め上
げて何やら
「俺様の夏は終わった…あぁ、あの青春の日々に帰りたい…」など
と呟いている。

こんな奴にも有ったんだな、青春の日々。

「では、みなさん、プライベートビーチの方を見てください！」

そうひとみが両手に口を当てて叫ぶと俺たちは一斉にプライベート
ビーチの方向を見る。
すると数秒後にヒュルルルルル…という音と共に火の尾が
空高く舞い上がりそれは綺麗な丸い向日葵の様な巨大な花火が
ドーーーーーーンッ！！
と上がった。

「おおーーーー」

俺は素直に感動した。

田辺は花火の巨大な音に耳を塞ぎながらも
「すげーっ、きれーだ！きれーー！！」
と興奮を隠せない様子だし、章太郎も満足そうにそれを見上げている。
どことなく姉貴も満更では無さそうにその花火を見終えると
「よし、片付けるか」
と言って俺たちは後片付けを始めた。

あっという間の密度の非常に濃い一週間は幕を閉じて、
俺たちは次の日にひとみの家の自動車に揺られて自宅へと辿り着いた。

夏祭り

「つかれたー、何か一年間は遊んだ気がするな」
そう言ってベッドへと倒れこむ。
そのまま疲れた体を癒すように眠りにつこうとすると携帯の着信メールがなった。
ダルい体を起こして右手を携帯に伸ばし、画面を見る。
ひとみからか…あいつには今回ばかりは世話になったな…

タイトル「夏祭りに行きませんか？」

夏祭り…？
ああ、一週間後には祭りがあったっけか。

「先輩、先輩、あたしは今、合宿での余韻に浸って体の火照りを収めるのに大変です、
あっ、ダメです、そんなところに…」

…どうでもいいがこの前半のくだりは要らないだろ、
大金持ちのお嬢様で顔が良くても性格でかなり損してるよな、絶対。

「ところで来週の夏祭りの日、予定ありますか？良かったらみんなで行きませんか？
ではでは親愛なる先輩のひとみより」

俺は携帯を閉じると体を起こして姉貴の部屋のドアをノックする。

「…何だ、バカ」
俺と同じ位疲れたような声が返ってきた。

俺はドア越しから用件だけを伝える。

「ひとみからメール、来週夏祭りにみんなで行かないかって」

暫く沈黙が続いた後に

「…考えておく、寝させてくれ」

とだけ返ってきたので俺も疲れてたしその日は自分の部屋に戻って大人しく寝ることにした。

翌日、泪乃の朝飯を持って姉貴の部屋に行くと姉貴はもう疲れが取れたらしく

「よう、元気ないなバカ」

と言って爽やかな皮肉と共に飛び切りの笑顔をプレゼントしてくれた。

「もう元気になってる姉貴と泪乃が羨ましいよ」

俺はそう言いながら泪乃の前に皿を置くと「待て」の合図をする。すっかり手馴れたもので泪乃は大人しく「良し」の合図が出るまで待っている。

「ところで…昨日の夜言ってたことだが…」

姉貴がそう言葉を紡いだ。

「おう、夏祭り、行くのか？」

「うむ、久しぶりに浴衣を着て見るのも悪く有るまい、ド変態と幼女には私から伝えておくからバカは章太郎に連絡をしておけ」

と言った。

姉貴の浴衣、ね。

金髪のくせに妙に浴衣が似合ったりするからこの世は不思議だ。
「了解了解」と俺は頷くと章太郎に連絡して置いた。
泪乃が見つかったらどうするかなんて問題も今や然して
大した問題でも無くて一週間後、夏祭り当日がやってきた。

「おい、姉貴、まだか？」
俺は姉貴のドアの前で腕組みしながらドアに背を当てて言った。

「ちょっと待て…泪乃、ほらこっち向け、よし、いいぞ」
そう言うと姉貴の声が終わりドアが開いた。
俺は突然開いたドアに盛大に背中からズッコけて頭を打った。

「〜〜〜〜〜〜っ！！？」
痛みに顔を顰めながら目を開けると浴衣姿で腕を組む姉貴と
同じく浴衣姿で不思議そうに袖を持って見回す泪乃の姿があった。

…正直、二人とも、凄く可愛かった。
姉貴は金髪のロングを盛っており、丁寧にかんざしまで挿している。
泪乃は犬耳を隠すように二つおだんごを作っていて、
どうも尻尾は浴衣の中に無理やり押し込んでるらしい。

うん、どこからどう見ても普通の人間の女の子だな。

「無闇に吼えるなよ、泪乃」
姉貴の言葉に泪乃は無言でこくこくと頷いた。
良い傾向だ、賢さも順調に伸びてるな。

「さて、では待ち合わせの場所に向かうとするか、
待たせてあのド変態のボディーガードの目の仇にされるのは御免被

りたいからな」
姉貴はそう言うと泪乃の手を取ってさっさと家を出た。
ちなみに母さんは父さんと一緒に出かけてて今いない。
だから堂々と泪乃を連れ回せるんだがな。
待ち合わせ場所に着くとそこには章太郎が無愛想な顔で立っていた。
横には山のような綿飴を持った田辺がいる。
「何だ、もう来てたのか、お前ら」
「早く来たお陰で俺の財布は大打撃だ」
章太郎はそう言うと親指で田辺の持つ綿飴の山を指差した。
田辺は悪びれた様子も無く
「わたあめ、うまーっ、あまーっ！」
などと叫びながら今日も上機嫌だ。
「せーんぱい♪」
と、突然後ろからかなりいい衝撃のタックルをかまされて
俺は驚愕と共に後ろを振り返ると浴衣姿で抱きついてきたひとみがいた。
ショートヘアーの髪のてっぺんを小さく纏めており、
普段見るひとみとちょっと違った雰囲気がした。
「どうです？あたしのゆ・か・た！萌えますか？何ならここでどうぞ一発遠慮なくっ！」
…違った気がしただけだった。
今日もこいつの頭の中は変態な事で一杯だった。
「おーう、腐ったミカンども！」

…気のせいか遠くから聞き覚えのある声がするな。
「幻聴だな」「幻聴です」
姉貴とひとみが同時に呟いた。
横目でちらりと見ると紛れもなく、禿沢であり…
って何だ、あいつ…幼い女の子の手を引いてこっちへやってくるぞ。

「おい、姉貴…禿沢、誰か連れて来てるぞ、小さな女の子だ」
「なんですって！？」
俺の声に反応したのは姉貴じゃなくてひとみだった。
睨む様に禿沢の声の方を見るとマジマジと禿沢と仲良く手を繋いでいる女の子を見る。

「あ…有り得ない…あの宇宙の屑があんな
可愛い女の子とあんな楽しそうに…手を、繋いで…？」

ひとみは余りのショックによろよろとその場に倒れそうになる。

「いよう、腐ったミカンども、今日も元気か、グハハハハ！！」
禿沢が陽気にそう言うと姉貴は心底嫌そうな顔で禿沢を見て
「何時から犯罪者になった、はげピザ」
と吐き捨てた。

「犯罪者？何を言ってる、滝沢シモーナ」
「黙れ、ロリコン誘拐魔、今すぐ警察に自首してこい、人類の敵」
姉貴が女の子を指差しながらそう言うと女の子はクスクスと笑みを零して
「まぁ、貴方たちが主人が顧問をしている部活の生徒さん？」
と言った。
はっ…？

そら、みみだよな？
今なんつった。
主人…？

姉貴もひとみも章太郎もＵＭＡや宇宙人でも見たかのような顔をして女の子を見ている。
田辺と泪乃はマイペースに二人で遊んでいた。

「おう、紹介してやる、光栄に思え腐ったミカンども、俺様のワイフ…だっ！？」

禿沢の全ての言葉が終わる前にひとみの全力の右正拳が禿沢の鳩尾に炸裂した。

「こ、こ、こ、こんな幼い子を拉致してっ！この宇宙の汚点！今すぐ死ねっ！屑！！」

叫びながら女の子を自分の方へと引き寄せるひとみ。
「大丈夫でしたか？もう怖くないですよ、
お姉ちゃんたちがお家までつれて帰ってあげますからねー」
そう言って女の子に聞かせるものの女の子はきょとんとした顔で
「あの…本当なんですよ？私は彼の妻です、一応今年で２５になるんですよ」

そう言って女の子は微笑んだ。
俺たちに二重三重の衝撃が与えられる。
ひとみなど余りのショックに口を半開きにしてパクパクと金魚のように何か呟いている。
…しかし、２５？

どう見ても8～9歳にしか見えないぞ…？
田辺と同類のような人種がこの世に二人もいたとは…
しかもよりによってあの禿沢の妻と来たもんだ。
禿沢は鳩尾を押さえながら

「げほっ、き、貴様、ちょっと金を持ってるからといい気になるなよ、
こいつは正真正銘、俺様のワイフだ！」

「…何がどうすればこんな非日常的でどこかで魔王が
復活してこの世を地獄に陥れる方がまだ現実的なことが起こりえるんですか…っ！？
……はっ、さては覚せい剤を使用しましたねっ！！？」

「するかボケェ！！」

禿沢とひとみが激しく言い争いをしている中、
章太郎が自称・禿沢の妻の幼女マーク2の目の前に座り込むと
「本当に黒沢の奥さんなんですか？」
と聞いた。

当然の疑問だ。
禿沢には悪いがちっとも夫婦に見えん。
親子にも見えん。
似てないからな。
どっからどう見ても祭りの最中に連れ去ってきた犯罪者とその被害者だ。

「本当です、ほら」
と幼女は左手を前に出す、

とその薬指には確かにエンゲージリングが光っていて
章太郎は突きつけられた事実に思わず息を呑んだ。

「２５と言うのも本当か？」
姉貴は腕組みをしたまま禿沢の奥さんに言った。
「はい、正確には今年で２６になります」
そう言って禿沢の奥さんは、はにかむ。
精神年齢はちゃんと大人だな、そこら辺は田辺と違う点だ。
しかし、２６…ねぇ、１３０ちょっとしかない身長に幼い顔に幼い声、
成る程、禿沢が田辺に固執する訳が分かった気がする。

「…まったくワイフと夏祭りに来たら
貴様らの面が見えたからワザワザ挨拶してやったものを…何だ、この仕打ちは…」

ブツブツと文句言う禿沢をスルーしてひとみは禿沢の奥さんの方に振り向いて

「こ、こいつのどこを気に入って結婚なんて無茶なことを…弱みでも握られましたかっ！？」
「はぁ…正直に言うと性格…でしょうか…」

この奥さん人見る目ねぇ…！！

「わ、悪いことは言わないのです、今すぐ離婚しましょう、
そうしましょう、何なら家に来てもいいのです」とひとみは早口に捲くし立てた。

ひとみVS禿沢&シモーナVS俺

「さっきから黙って聞いていれば冠凪ひとみ！
もう金持ちだからとかそういう目で見んぞ…やはり貴様と俺様は相容れない存在だ…！！」

「こちらは元々、貴方のようなばい菌と同じ空気を吸うだけでもお断りなのです！！」
と二人の間にバチバチと火花が飛び散った。

「くくく…良かろう、冠凪ひとみ、ならば勝負だ！」
「いいですとも！！」

二人のバックには活火山が噴火したような背景が今にも出そうな勢いで
ドーン！という効果音と共にぎりぎりと向き合った。

「では、公平な審判をするために私が審判をしてやろう」
「姉貴？何考えてんだ！？」

俺が姉貴の方を見ると姉貴は意地悪そうな笑顔を浮かべて
「こんなバカなイベントを見逃してやる手はあるまい、
何ならはげピザの完敗で奥さんに愛想を尽かされるというのも面白いな」
「待て、滝沢シモーナ、貴様は冠凪グループの手先ではないか！？」
「ふざけるなよ、はげピザ、私はどこにも所属しない、
目の前に金品をぶら下げられてヘコヘコするどこぞの高校教師とは違うんだ」

相変わらず容赦ねぇな…
禿沢は姉貴の言葉にぐぐぐぐ…とか唸ってる。

「では種目はそうだな、これが良かろう」
そう言って姉貴が指差したのは型抜きの屋台だ。
未だ絶滅してなかったのか、型抜き。

「良いだろう、覚悟は出来たか？冠凪ひとみ！」
「ふん、貴方のように阿諛追従をモットーとした人間にあたしが負ける訳が無いのです」

「あゆ・・・何？」

禿沢の疑問に姉貴がやる気のない声で答える。
「自分が気に入られるためになんでもする人間のことだ、
正にはげピザのためにある四字熟語だな」
「しかし型抜きじゃどっちが勝つかなんて分からないだろ？集中力の勝負だからな」

俺がそう言うと姉貴は鼻で笑い
「甘いなバカ、ド変態は日頃から物書きとして集中力を高めている」
「それなら禿沢だって授業内容考えたりで集中力高めてんじゃねぇのか？」
「はげピザの授業をお前はちゃんと受けたことがあるのか？
あんな教科書通りの授業、応用の欠片も無いテスト問題、
あれで頭を使ってるとするなら一度病院に行ったほうがいいレベルだ、
結論、はげピザは考えて授業を行っていない、
つまり、集中力の差はド変態とは月とスッポン、太陽と線香花火くらいの差があるさ」

そんなものかね…と2人を見てみるとひとみは
確かに無言でひたすら型抜きに打ち込んでいるのに対して
禿沢は一々後ろから掛かる奥さんの声援にだらしない笑みを浮かべて振り返り手を振っていた。

「なーなー、せんぱい、ふたりはなにをやっているのだ？」

そう言って田辺が俺の袖を引っ張ってきた。

「何だ、田辺、型抜き知らないのか？」
「し、しってるぞ、せんぱいをためそうとしただけなのだ！
あれだ、かたをぬくんだ！こうはかしこいからこのくらいしってるのだ！」

いや、まぁ大体合ってるけど…

「幼女、型抜きで使われているあのシートは食べられるんだぞ」
「ほ、ほんとか！？」
「ああ、はげピザが失敗したやつがあるだろ？試しに食べてみるといい」
「おあー、これがくえるのかー！？しんじられねー、
あはははははーーー、はげさわー、いっこもらうぞーー！！」

そう言うと『失敗していない』方の型抜きをひょいと
横から奪って田辺は口の中に放り込んだ。

「あ、あああああああああ！！」

禿沢はあまりの出来事に頭を抱えてパニくっている。

「もむもむ…ぶちょー、あまりおいしくないのだ…」
「誰が美味い物だと言った？私は食べられると言っただけだ」
「むきー！こうをだましたのか！？」
「騙してない、事実を言っただけだ」
「くぅ～…なぁなぁ、ふくぶちょう、くちなおしにりんごあめがたべたい」
「はぁ！？お前、まだ俺の財布から金を搾り取る気か！？」

ブツブツと言いながら章太郎は田辺と共にリンゴ飴の屋台へと向かった。

「出来たのです！」
そう叫ぶとひとみは立ち上がり崩れない様にそっと綺麗に抜かれた型を屋台のおっちゃんに見せた。

「こ…これはうちの店でもっとも難易度の高い不死鳥じゃないか…！お譲ちゃん、やるねぇ！」
「それほどでもあるのです、あたしはあそこで最低ランクのみかんにすら手こずっている二足歩行型単細胞とは出来が違いますから」

ひとみは誇らしげに胸に手を当てて威張った。

「く…くぅうううううううう…」
ひとみの言葉を聞いて心底悔しそうに呻き声を上げる禿沢。

「ふ、ふん、こんなガキの遊びに付き合っていられるものか！帰るぞ、マイワイフ！！」
「まぁあなたったら子供の遊びで大人気ない、可愛い人」

奥さんの最後の一言に文芸部員全員が固まる音がした。
…確かに俺にはその音が聞こえた。

「では」
と言ってペコリと奥さんは低い頭を更に低く下げてお辞儀をすると
禿沢の後を追っていった。

「…ま、まぁ、世の中には変わった趣向の人間もいるという事だな
…」
若干、頬を引きつらせながら姉貴が呟いた。

「あの宇宙の汚点…あんな可愛い子を毎晩手篭めにしているんです
か…
ふふふ、先輩、あたしは今ちょっと本気で殺意が芽生えそうですよ
…」

ひとみもひとみで危ない事を言い出した。
くぃくぃと姉貴の浴衣を引っ張る泪乃。

「どうした？」
泪乃はそわそわしながら姉貴とある屋台を交互に見る。
それは輪投げ屋だった。

「なんだ、やりたいのか？」
姉貴の問いにこくこくと頷く泪乃。

「ふむ…まぁ、いいか、ただやるのも面白くないな、よしバカ、私
たちも勝負するか」
「はぁ？やだよ、メンドクセェ…」

そう呟く俺に姉貴はにやりと笑い
「こんなにも飼い犬が哀願しているのに関わらず問答無用で
切り捨てるとは流石人としてどうかしてるな、こんなバカな弟を持
つ私も災難だな、
なぁ泪乃？泪乃はこんなにやりたがってるのになぁ？」

「くぅ～ん」

ぐぉ…容赦の無い罵詈雑言を浴びせてくる姉貴と大きな瞳で
懇願してくる泪乃の前に俺はあっさり撃沈。

「先輩っ！頑張ってくださいなのです！」
「おー、いけいけ、ふたりともー！」
「まぁ、適当にやってろ」

三者三様のご声援ありがとうございます…。

「親父、３人、１人５回分だ」
そう言うと姉貴は巾着から財布を取り出して金を店主に払う。

「負けた方は何をするんだ？」
「そうだな、カキ氷でも奢って貰おうか」
「そんなんでいいのか？」

姉貴は少し怪訝な顔をして「どういう意味だ？」と言った。
「いや、姉貴のことだから１人逆立ち町内一周とか
１人カラオケ７２時間耐久レースとか提案してくるのかと…」

「一度貴様の中での私の価値感を洗いざらい吐いてもらう必要があ

るな…」

冷ややかな目線で姉貴が呟く。

「泪乃は対象外だな？」

「当然だ、ルールも知らない奴を入れるほど私も鬼ではない」

これはちょっと嘘だな。

対象外なのはあくまで泪乃だからであって例えば

これが田辺相手だったりすれば姉貴は問答無用で最下位に引きずり込むだろう。

なんだかんだで親バカ、いや飼い主バカなんだよな。

そう思うとちょっと姉貴が可愛く見えてきて思わず吹き出してしまった。

「…なんだ？」

ジト目でこちらを見る姉貴。

「いや、何でも」

「よし、じゃあ始めるぞ」

そう言うと姉貴はすぐさま手首のスナップを利かせて一つのＣＤをゲットした。

「ふふ、まず１点先取だ」

「なろっ…」

俺は無難に「夏祭りで好きな商品一つ貰える券」と書かれた場所を狙う。

スポッという音と共に棒に輪が吸い込まれる。

「よっしゃ」

「ふん、イキナリそんな券を狙うなんて
もう負けを覚悟して自分の金をケチりたいだけじゃないのか？」

くぉお…人がせっかく悦に浸ってるときに何言うかね、この女。

「ふん、まぁ1対1だな、次だ次」

そう言って姉貴と俺は交互に輪を投げる。

現在5対4、俺の順番だ。
空いてるのは後5つ・・・どれも高難易度だな、
くそっ。意を決して投げようとした時後ろから不意に声がした。

「せーんぱいっ！これを決めたらあたしが良い事してあげちゃいます！！」

はぁ！？ひとみか？
後ろから何叫んでんだあいつ…。

つるっ。
…あ。ひとみの言葉とほぼ同時にすっぽ抜けるように俺の手から輪が外れた。
ふわりと空中を舞ってぽとりと地面に虚しく落ちる輪。

「ふ…私の勝ちだな」
「む、無効だ！今のはひとみが声を突然かけてきたから…」

「原因が何にせよ、外したのは事実だ、この勝負、私の勝ちだ、
はっはっは、残念だったなバカ、私に勝とうなど１００年ほど早かったな」
「く、くそ…たかが輪投げで負けただけなのに何だこの敗北感は…」
俺はきっとひとみを睨むとひとみは軽くごめんなさいと舌を出して両手でこちらを合わせていた。
…はぁ、そんな謝られ方したら許さない訳に行かないだろ…。
「さぁ、泪乃。お前の番だ、やってみろ」
そう言うと姉貴は輪を５つ泪乃に渡す。
「わふっ」
泪乃は１つの輪を口に加えると勢いよく上半身を捻って輪を飛ばした。
しゅるるると飛んだ輪はブーメランのごとく途中で引き返して丁度一番高難易度と思われる景品の場所へ嵌るように入った。
「わふっ」
その後４つも全く同じやり方で残り４つの景品を瞬く間に掻っ攫う。
…うわぁ、輪投げ屋の店主、呆然と見てるよ。
「泪乃のやつ…中々やるじゃないか…」
「泪乃ちゃん、凄いのです…」
こうして全景品をゲットして
「お譲ちゃんたちには敵わないなー」
と半泣きになる店主を横目に俺たちは全景品を抱えてその場を後に

した。

…ちなみにカキ氷はきっちりと先に取った

「夏祭りで好きな商品一つ貰える券」で奢った。

姉貴が選んだのはレモン味だ。

1人で食べるのはあれだからとかいう理由でひとみと田辺と章太郎の分まで奢らされた。

仕方ないので俺は自分の分とカキ氷屋のおっちゃんに頼み込んで泪乃用にシロップのかかってないただの砕き氷を購入。

何の味もしないはずのシロップなしカキ氷を泪乃は美味そうに平らげていた。

「…ふぅ」

夏休み最終日、姉貴はそう溜め息を漏らすとペンを置いた。

「何書いてたんだ？」

「夏休みの記録だ」

「ふぅん…相変わらず文学のことは真面目だな、姉貴は」

「失敬だな、バカ、私は何時でも大真面目だ」

「…まぁ、いいけどさ、明日から学校なんだから早く寝ろよ」

「私の台詞だ、バカ！何時までも泪乃の相手ばかりしてないで寝ろ！！」

「へいへい」

俺はそう返事をすると泪乃の頭を軽く撫でて自分の部屋に戻った。

ばれた！

そして二学期が始まって最初の日曜がやってきた頃。

「よし、そうだ、いいぞ、泪乃！」

「わぅ？くぅ～ん、はふっ！」

姉貴は俺を部屋に呼びつけると泪乃を自分の机の椅子に座らせて何やらやっていた。

「わんっ！」

「よし、完成だ！」

「何が出来たんだ？」

「ふっふっふ、見て驚けバカ」

そう言って、姉貴は一枚の紙を俺に見せた。

何やらみみずがのたくったような文字で

「おはよう」

「ごめんなさい」

「さようなら」

と書かれている。

まさか…。

「これ…泪乃が？」

「その通りだ」

この女、マジで字を書かせやがった。

「いいか泪乃、これは朝起きたときに使う挨拶、
こっちは悪いことをしたときに使う言葉、
最後に書いたのは部活の帰りに皆と別れるときに使う言葉だ」
「わんっ！」
泪乃は元気良く笑顔で吼えた。
本当にわかってるのかね…

コンコン。

その時、ドアからノックが鳴る。

「「！」」

「？」

俺と姉貴に緊張の色が走った。
泪乃はそんな俺たちを不思議そうな顔をして見て首を傾げて見せた。

「姉貴、母さんだ、やばいぞ」
「う、うむ、とりあえず泪乃をクローゼットの中に隠そう」

コンコン。

二回目のノック。

俺はクローゼットを乱暴に開けると泪乃を無理やり中へと押し込め

る。

「くぅ～ん？」
「いいか、静かにしてろよ」

そう言うと俺はゆっくりクローゼットを閉めて姉貴にＯＫサインを出した。

コンコン。

三回目のノック。

「どうぞ、母様」
姉貴が答えた。
ガチャリと開くドア。

「あらあら、翔太様もこちらにおられたのですか？
それより今何かお犬の鳴き声が聞こえたのですが…」

「き、気のせいだよ、なあ？姉貴」
「はい、母様の聞き違えかと」

姉貴は母さんが苦手だ。
小さいころ、母さんが親父と再婚するまでの間、
女手一人で面倒を見てくれていたことに引け目を感じるらしい。

「そうですか？なら良いのですが、我が家はペット様はご禁止であられますので」
「わかっています、なあ翔太？」

「あ、ああ」
と、そう言ったとき、クローゼットががたっと揺れた。
「あら？何か崩れたのでしょうか？」
慌てて姉貴がクローゼットを開けようとする母さんを止めに入る。
「母様！後で私がちゃんと直しておきますから！」
「あらあら、これくらいわたくしがお直しいたしますわ」
そう言うと問答無用で母さんはクローゼットを開けた。
当然、中から出てきたのは泪乃だ。
「お友達…ですか？」
「は、はい、そうなんです、いい年してかくれんぼが好きで…」
姉貴にしては下手な嘘だ。
相当動揺してるな。
とは言え、俺だって気が気じゃない。
「まぁまぁ、貴方様のお名前は何ていうのかしら？」
「わんっ！」
「こら、泪乃っ！」
「不思議な言葉を使うのですね、そうまるでお犬のような…」
そこで、少し首を傾げた後、母さんはこちらを振り返る。
表面上はニコニコしてるいつもの母さんだ、が、俺と姉貴には直ぐに分かった。
こう見えて母さんは勘が鋭い。
「シモーナ様、翔太様」

あくまで微笑みを絶やさず、
しかし物凄いプレッシャーを放ちながら母さんは俺たちの名前を呼んだ。

「本当のことを仰ってくださいますね？」
「……はい」

姉貴は観念したかのようにそう呟いた。

三人で一階のリビングへと降りる。
泪乃には「待て」と言っておいた。

少しの沈黙の後、姉貴はぽつり、ぽつりと話し始める。
6月に初めて泪乃を見た時のことから。
泪乃が人間の姿をしているが実は犬なのだということ。
それから部室と姉貴の部屋でこっそり飼っていたこと。
夏休みひとみの別荘に合宿に行ったこと。
夏祭りにいったこと。
全て話し終わってから姉貴は恐る恐る母さんを見る。

「大体の事情は把握いたしました、シモーナ様」
「…はい」
「直ぐにお捨てになってください」
「母様…それは！」
「我が家はペット様は禁止です、大体、そんな得体の知れないお犬とも人間とも区別がつかないような訳のわからない生物を野放しにするのがおかしいのですよ」
「野放しにするのがおかしいなら部室で面倒を見ますから…！」
「いけません、得体が知れない事柄は事実なのです。

早急に関わりあうのをお止めになってください」
そこまで言うと母さんはふと、顎に手をやった。
「ただ捨てるだけでは他の方に迷惑がかかるかも知れません、保健所に言って安楽死させた方が…」
「母様！」
「シモーナ様、何故庇うのですか？
もしかしたら未知のウィルスなどを保有しているのかもしれないのですよ？」
「しかし、だからと言って直ぐに殺すなどと…」
「そもそも地球上にあのような生物が存在しているのがおかしいのです。
安楽死は当然のことだと思いますが？」
「…しかし」

ここまでの母さんと姉貴の会話を聞いたところで俺の思考回路がどうやら一本飛んだようだ。
思いっきりテーブルを叩いて俺は立ち上がった。
姉貴も母さんもその音に驚いて俺を見ている。
構わず俺は母さんに早口で言った。
「母さんが泪乃の何を知ってそんなこと言ってる！？
生き物を大事にしろっていつも言ってたのは母さんじゃないか！
それをちょっと見た目が変わってるってだけで保健所！？安楽死！？
ふざけんのもいい加減にしろよ！！」
「翔太様」

「悪いけど、今の母さんの意見は何も聞く気にならない！
泪乃は俺たちが拾ったんだ、俺たちが責任を持って飼う！
もし母さんが反対するのならマンションでも借りて出て行ってやるよ！！」

「…お前」
「行くぞ、姉貴」
「あ、ああ…」

俺は姉貴の手を取ると怒り任せにドアを開けて二階へ登っていった。
廊下の途中で姉貴の足が止まる。

「どうしたんだよ？」
「いや…何でもない、まさか私がバカに遅れを取るとは思わなかっただけだ」

俺はぽりぽりと鼻の頭を掻いた。

「…全部姉貴に教わったことだ」
「え？」

「小さな頃から言ってたろ、
口癖みたいに、「自分の信念を曲げるな」だの、「一度自分のやったことに責任を持て」だの」

「あ、ああ…そうだな、本当にそうだ…」

「だから泪乃の面倒は俺が、いや俺たちが見る、誰が何と言おうとだ」
「そうだな…私たちは泪乃の飼い主なのだからな…」

「そういうことだ」
「ふふ…何だか晴れ晴れとした、スッキリとした気分だ、今日は特別にビーフジャーキー二本やってもいいだろう」
「お、そりゃ泪乃も喜ぶぞ」

そう言って笑い合うと再び俺たちは歩き出した。
姉貴の部屋のドアを開ける。

「泪乃…？」

泪乃の姿が見えない。
クローゼットの中か？
そう思ってクローゼットを開けるがそこにも姿は見えなかった。

「おい…」
姉貴の声が震えているのに気付くのに何秒かかっただろう。
俺は姉気の方へと振り向いた。
姉貴は一枚の紙を持ってわなわなと震えていた。

「どうした…？」
俺がその紙を横から覗き込むとみみずがのたくった様な文字で二行、簡潔に書かれていた。

「ごめんなさい、さようなら」と。

見覚えないはずがない。
先ほど見た筆跡…間違いなく汨乃の文字だった。

俺は真っ青になった姉貴の手を引っ張って直ぐに家を飛び出した。
俺は姉貴の手を引きずるように外へと飛び出す。
途中、何か言いたそうな母さんと目が合ったがあえて無視した。

そして大団円

携帯電話を取り出して章太郎へと電話する。

プルルルル…プルルルル…

呼び出し音がやたらと長く感じた。

まだか、早く出ろよ。

『もしもし？』

「章太郎か！？」

『なんだ、翔太…何のようだ？』

「緊急事態だ！泪乃がいなくなった！」

『なんだと…？どういうことだ？』

「説明してる時間がねぇ！

俺と姉貴は商店街方面を探すから章太郎もひとみと田辺に連絡とって探すのを手伝ってくれ」

『わかった、今泪乃の来ている服装はわかるか？』

「家にいた時点での服装なら緑の帽子にいつもの制服だ！」

『よし、何かわかったら連絡する』

「頼む！」

そう言って携帯をしまい、商店街の方へと向かった。
俺は手を引いている姉貴の方をちらりと見る。
そうとう動揺している。
俯きながら「私と母の会話を聞いていたんだ、だから…」とうわ言のように呟いている。

俺は足を止めると姉貴の方に振り向き、肩を揺さぶった。
「しっかりしろ！らしくねぇぞ！！」
「……翔太」
姉貴は今にも泣きそうな顔をしていた。

「自分に問題があったんなら会ってから謝ればいい！とにかく、今は泪乃を探すのが先決だ！！」
「……あぁ」
姉貴は黙って頷くと俺と一緒に商店街へと向かう。
と、携帯が鳴った。

ひとみからのメールだ。

＝タイトル・無題＝

＝本文。

事情は聞きました。
あたしは学校の方を探します。
町内の方にも動かせる全人材を割きます。
絶対に泪乃ちゃんを見つけましょう。

＝

ひとみからのまともなメールなんて初めてじゃなかろうか。
何にせよ、一人でも探すのは多いほうがありがたい。

また、携帯が鳴る。
今度は電話、田辺だ。

「もしもし」
『せんぱいっ！るいのいなくなったってほんとかっ！？』
「本当だ、悪いが田辺も探すのを手伝ってくれ」
『わかった、こうもさがす！
こうはまだるいのにおてさせてないからな、かってにいなくなられてはこまるのだ！！』
「頼む」

簡潔に述べると俺は携帯を切った。

それから商店街をくまなく見て回る。
路地裏から道に置いてあるダンボールの中身まで見て回った。
２時間くらい経っただろうか。

雨が降り始めた。
随分と強い雨と風。
そういや通り雨に注意とか天気予報でやってたな。

姉貴もずぶ濡れになりながら傘もささずに懸命に探している。
三度、携帯が鳴る。
ナンバーディスプレイには章太郎の文字。

「なんだ？」

『一度、部室に集まれ、泪乃の行きそうな場所を検討しよう』
「わかった」
そう言うと携帯をしまい、姉貴を呼ぶ。
「姉貴、一度部室に行くぞ！泪乃の行きそうな場所を検討する！！」
「しかし…いや、わかった」
姉貴はまだ探したりないと、言った顔をしたが頭が良くて判断力もあるのが救いだ。
事情を飲み込んだように頷くと俺たちは部室へと向かう。
部室には既に他の3人が集まっていた。
「先輩！校内にはいませんでしたっ！」
「うらやまのほうにもいなかったのだ」
「2丁目、3丁目の方も回ってみたが手がかり無しだ」
「…そう、か」
「そんな顔するな、姉貴、絶対見つけてみせるさ」
「う、む」
「で、翔太、泪乃の行きそうな場所に心当たりとか無いか？」
章太郎が聞く。俺は頭をぼりぼりと掻いて、無い脳みそから情報を搾り出そうとする。
「泪乃の行きそうな場所と言ってもな…
ここか姉貴の部屋以外はほとんど出入りしてなかったからな…ひとみの別荘なんて遠すぎるし…」
そういや、初めて泪乃と会ったのもこんな雨が降ってたっけな…。
そうだ、確か朝に俺が寝坊したからショートカットしようと言って

いつもと違う道を通って学校に向かっていたら姉貴が泪乃を発見したんだ。

……

「そういや…あそこにはまだ行ってないな…」
「あそこ…？」
「初めて、泪乃と会った場所だ」
「行ってみましょう！先輩！！」
「ああ、他に手がかりが無い以上１％でもある確率にかけるべきだな」
「るいのがいるところがわかったのかー？」
「まだ確定じゃないけどな…これで居なかったら、流石に厳しくなるな」
「兎に角、行きましょう！！」

そう言うと俺たちは全員で強い雨の中、初めて泪乃と会った、あの場所へと向かう。
深い緑色の帽子を被り、制服姿で地べたに座り込んでいる女の子がそこにいた。

「「「「「泪乃！！」」」」」

「っ！」

泪乃は俺たちの叫びに気付くと、泣きそうな顔をしてこちらを見る。
そして顔を逸らして塞ぎ込んだ。

「泪乃」
「……」
俺の声に泪乃は反応しない。
構わずに俺は言葉を続けた。
「母さんとの会話…聞いていたんだな？」

びくっと泪乃の肩が震える。

「大丈夫だ、泪乃を保健所になんか連れて行かない、
安楽死なんてさせない俺たちはお前の飼い主だ、
俺たちはお前のことが好きだ、だから安心して戻って来い」
「……」

ふるふると小さく泪乃が首を横に振る。

「泪乃、戻って来い」
「るいのー、こうにおてするまでいなくなったらだめなのだっ！」
「泪乃ちゃん、戻ってきてください」

三人が口々と泪乃に向かって言葉を放つ。
ふわりと姉貴が泪乃を抱きしめた。

「すまなかったな、泪乃、私が母をなんとしても説得するからだから戻ってきてくれ…
もうお前は私たちの家族なんだ、犬とか人間とか外見とかそんなの関係ない。
私も翔太も血は繋がってないが家族だ、それと一緒だ。お前も家族だ。だから…」

姉貴の言葉が最後まで紡がれる前に泪乃の腕が姉貴の腰へと回った。

「くぅ〜ん…ひぅ」
泪乃はもう雨が伝っているのか涙が伝っているのかわからないくしゃくしゃの顔で泣き出した。

「帰ろう…私たちの家へ」
「……わんっ」

俺と姉貴は章太郎たちと別れ、泪乃を連れて家へと帰った。
ドアを開けると母さんが待っていた。

「母様…」
「…お風邪をお引きになられますよ、お風呂に入ってらしてください…その子も一緒に」
「…はい」

姉貴と泪乃が風呂に入ってる間に俺はバスタオルで頭を乱暴に拭くと洗濯籠へと放り込む。

「母さん」
「…わかっております、子供子供と思っておりましたのに、いつの間にか貴方様方も大人になっておられたのですね」

「じゃあ…？」
「お父様とも話し合いました、結論から申し上げますと
あの子の正式な飼い主が見つかるまでの間なら我が家に置いても良
い、ということですわ」

「本当…ですか？母様…」
丁度風呂から上がって泪乃と一緒にリビングへと入ってきた姉貴が
言った。

「はい、先ほどお父様に連絡したら翔太様と全く同じことを
言われてそれはもう大変怒られてしまいわたくし、ちょっぴり落ち
込んでおります」

そう言うと母さんは泪乃の手を握る。
「どんな生物であれ、生き物は生き物ですものね…
まぁ、次の飼い主が見つかるまでの間ですし我が家は本来ペット様
は禁止なのですが、
あなた様は見た目は人間ですし、問題ないとの判断です」

「やったな、姉貴」
「ああ、ああ、そうだな」

それから俺たちは姉貴の部屋へと行き、泪乃にビーフジャーキーを
上げた。

「おい、バカ、雨が上がったぞ」
「へぇ、やっぱり一時的な通り雨だったか」
「ちょっとベランダに出ないか？」
「…まぁ、いいけど？」

俺と姉貴はベランダに出る。

「その…今日は色々と済まなかったな、取り乱したところを見られるとは全く一生の不覚だ」
「別にいいよ、人間なんだ、時には取り乱したりもするさ」
そう言うと俺は姉貴を見て笑った。心なしか姉貴の顔が赤い。

「い、いい夜空だな」
「ああ」
「……翔太」
「何だ？」
「ちょっとだけ目を瞑ってくれないか？」

「何で？」
「いいから、早く瞑れ」
「わかったよ」

俺は意味もわからず目を瞑る。
不意に俺の唇にやわらかい物が触れた。
突然の事に思わず目を開ける。
2、3秒たっただろうか。姉貴の唇がそっと俺の唇から離れた。

「…途中で目を開けるな、バカ」
「いや…だって…何で…？」

姉貴はそっぽを向くと
「今日のお詫びと、礼だ、他の方法が思いつかなかったからな」
「……」

俺は自分の唇に指を当てる。
まだ、少し感触が残ってた。
「か、勘違いするな、これはただの礼だからな」
その姉貴の言葉に俺は思わず吹き出すと。
「わかってるよ」と言った。

「わんっ！」突然、俺と姉貴の間に泪乃が割り込んでくる。
そして、泪乃は笑いながら姉貴の唇を奪った。

「ん、ん～～～～～っ！！？」

姉貴は吃驚したように泪乃を突き飛ばし、驚愕した表情で泪乃を見る。

「な、何をする！？」

俺は笑いながら、
「今の姉貴の台詞、聞いてたんだろ、そして覚えたんだ、キスはお礼の印だって」
「ち、違うぞ、泪乃、これは普通は好きな異性同士がするものであって今回は特別なんだ、
だから、むやみやたらにするな…んっ～～～！！？」
姉貴の言葉の途中でまた泪乃が姉貴にキスをする。
尻尾を嬉しそうにぶんぶんと振りながら。

「あ〜〜〜〜っ！！」

ベランダの下の方から声がした。

「ぶ、部長と泪乃ちゃんがキスしてるっ！！部長にも実はそっちの気が！！？」

「おー、すごいのだ、こうははじめてきすというものをみたぞっ！！」

「…何やってんだ、お前ら？」

三人だった。

恐らくはその後どうなったのか心配になって来てくれたんだろうが、タイミングが悪かったな。

姉貴は真っ赤になりながら弁解してる。

「じゃあ、期限付きとは言え、泪乃を置いてもいいということか」

「期限なんてねぇよ」

「え？だって飼い主が見つかるまでじゃないんですか？」

「飼い主ならもう決まってる、だろ？泪乃」

俺がそう言って泪乃の頭に手を置くと泪乃は心底嬉しそうに
「わぉーーーーんっ！！」と高らかに吼えた。
泪乃の遠吠えは満天の星空に吸い込まれるかのようにどこまでもこだましていった。

そして大団円（後書き）

ホントは少しずつ小出しにする予定が、
いっぺんに出しちゃいましたー／（＾ｏ＾）＼

そんなわけで「飼い主募集します！」お送りしました。
最初書いたときはもっと短くて7話くらい？で夏休み編がすっぱり無くて
さすがに短すぎるかなと思いながら1ヶ月くらい放置していたのですが
先月くらいにちょっとずつ夏祭り編を書き足して行って
今月頭に完成したのがこの作品ですね。
公開するかどうかはホントに躊躇いました、自分、こういうジャンルを書くのは凄い苦手なので＾＾；

よければ感想お待ちしてますｍ（＿＿）ｍ

では、また次回作があれば、その時にお会いしましょう。
ペルソナは凄く難産中です。。。
あれはリアルタイムで書いてるので…＾＾；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4346n/

飼い主募集します！

2010年10月9日10時16分発行